

增補雅言集臨見

六

813.6
I 619g
~~NWJ~~



813.6
I619g
Nw



691322

増補雅言集覽卷之六

石川雅望集
中島廣足補

○波の部

そや そや 二様あれどいづれもどい早クの意也是ハ過去也。過去 **そやく** **そやう**

そや 別 (いせ物) 六 **そや** 是ハ次のそや 未夜もあけかんと思ひつゝ、あさりける鬼そ

や一口よくひてけそ(拾) 春 赤人 「きのふこそ年にくれいり春霞をまがの山まむそ

ちあけり(後拾) 雜二、馬 内侍 「春雨のふるめりくもつぐるりかそやかしの木れもりま

し物を(古) 戀二、深 養父 「今のそや戀をまゝをあひえんとたのめしことぞ命をりける

(後拾) 戀三、道雅 「今のそや命をえかんとまかりを人づてあらせいふよしも夕な(風雅)

雜下、久 長親王 「忘れぬ涙のおか下袂あてそやな、とせの秋も來まけり **補**(枕) 六 御り

へりそやかとあれどととも聞え給ぬを(玉葉) 冬 貫之 「ことこそやあそああけか

んあし引の山霞のさてりとそやもん(同) 春上、入道前 太政大臣 「今こそ花咲ぬらそつせ山

あさるる雲のさねまりをれる 此意 **そやく** **そやう** も別 **そやと**

是ハ未來までハヤウユケハヤウセヨあど。の意也。○下知あるも願の意なるもあり。

(枕)十一、五 とくおりのよとの給ふ云々 是され打あけてもやとの給ふ(うつろ 樓の上)

(上)五 こあさりあさしまりりてもやとぞ仰せよとの給ひ云々 (枕)九ノ一 后詞局

へおりにまなりうかりぬらんさばもやとてよさりのいとくと仰せらる、(源)うき舟 十六

九さらばもやとて此人をりへいさまふ(方)十五「わり宿の萩さきおけりちらぬま

早きて見ませ奈良の里人(同)十一「わたり守舟早とせ一とせ二とびりよふ

君からなくよ(拾)貫之「かのりさまもやとぎよせよ郭公道よあきつと人よりさら

ん(後撰)賀(貫之)「大原やをいすの山は小松ばらもやとさり、れ千代の蔭とん(

順)「けさこればうつろひよけそ女郎花されまきりせて秋のそやめけ(竹とり)も

やりの御使は對面し給へ(古)旅 わさし守もや舟よのれ日もくれぬといひければ(

うつろ 樓の上)十五かの人くももや物せられよとて(いせ物)段六 もや夜もあけあん

と思ひつゝ、るさりける(ハヤウ夜のアケヨ カンと願ふ意也)

て云々 (補)もや (昔聞)九ノ七 ついでちてもやをうるよまへの串はあさりぬ 云々 おとや

もや (ハヤウ)ハヤウくもや (落くる)四、四の君もやとさせ給へと聞え給へばもや (

といそがし給へと(うつろ 樓の上)十一南のひさしよ出給へるをもや (とてのせ

けて出をを

給ふ(同)十五左のおと(詞) おそしもや (と仰せらる(かほろふ日記)中、下人々も

や (とそ)のらして(枕)廿四 ちりくと、んうれしきもやとと引いであ

もや (添へ)かるく(方)廿六 「いざ子ども早やまとへ大とものこつは瀆松まちこひ

ぬらん (歸らまやいと願) (同)卅七 わがまつ月のもやもてらぬり (とよめるをせも月を

ふ意ふくめり、次の(後撰)春上左 「松もひき若菜もつまはかりぬるをいつしり櫻

哥ども皆願の意也 (後撰)大臣 「松もひき若菜もつまはかりぬるをいつしり櫻

もやもさうかん(拾)夏中務 「夏によれ心をいれる郭公もやもなうかんあけもこそを

れ(貫之)「あかむねはとびいきものを山のまよ入日とくさしもやもくれあん(補)

(同)「見る人もなくて我とほとほとをそがれ時よもやもならかん

もや (てよをは)の(古事)七 いゆきまもらひた、りへは和禮波夜(宣長云吾ハ

いふまちうい。案するはサテ)とあげく意の中よいと(同)四十阿豆麻

波夜(源)梅うえ)三心よいれぞもいりかい給へり(とさり)わり云々 きまことま

覺えしもや(同)下七 わが身さへ限りと覺ゆる折りのありしもや(榮)見えて

ぬゆめ)一ひと、せの御子日よ此とさりのいとらうめでたりりしもやとおろし出

るもかあしけまば(同)つ花)四十これよつけても一のよこの生れ給へりし折と

よも見せきりざりしとや(源 毛)八冊いさりせんとし思ひざりしとや(同 竹川)十冊や
 そりら思ひ給へられしとや(拾 別贈大臣)「君がむ宿れ梢のゆく」とかくる、
 までもかへりしとや(源 横笛)九 あれいとめづらりあるねまかきからし給ひし
 とや(うつ)十冊十一冊まことの女御の君をさごけりりし曉見奉りしとや
(同 國ゆつり)十五冊ひと日御方の御事よりておとまかしくくさごれ奉りし
 とや(源 未摘)廿三内教坊内侍所の事とよか、るものどものあるとやとをりし(同 花の
 宴)七 かやうあるよつけてもまづかのさりのありさまのこよかうおくまりさる
 とやとありがさう思ひくらべられ給ふ(蜻蛉日記)十一上下「世中をそりききものとし
 さ、きのうもる、山はかけくらんとや(源 上七)十四冊ひがおぞえどもよとりませ
 つ、あやしきむりしのことをも出まうせきつらんとや(同 上七)十四冊ひがおぞえどもよとりませ
 月うけの見おとりせをはまをあらんとや(同 上七)十四冊ひがおぞえどもよとりませ
 さを人々ごぶるよ川づらまをいからんとやと思ひ出(同 常夏)五 あかづらひか
 らぬ方よてもてあされかんとや(源 下七)十四冊ひがおぞえどもよとりませ
 からお人けしうのあらととやとおしむり聞(同 あけまき)九冊ひきつくりひ給
 へるさまはましてさぐひあらととやとおす(宇治拾)十一冊さをひてゆけばゆり

しとやと思へどもいりざらんも又心えられぬさまかれ(枕)一冊「しとの
 ついものうられいづもく君をばふりくおもふとやわが(同 廿二)さて打きて
 出ぬるをとや(榮 月の宴)いとくことのもえありてをうりりしとやと(同 廿二)さて打きて
 のよるこび)このわさりのいとくことのもえありてをうりりしとや(源 朝顔)廿一をりきことと
 さをもい給ひしとや(同 東)廿二めやをきあそんめをかんささめさるる
(同)六十四 よういあさからぬもの給ひしとやと(同 六)いとをりくあそれ
 ひき給ひしとやとおすいいて、(かけろふ日記)九冊よういあらんとやとふと見えて
(定頼集)「かつきせんあまのいささも千ひろなるるめいかくばかひあらととや
(うつ)七冊十 人のえせぬとやとのたまひて(同 院)三 かつちこ、ろ
 めでさりしとや(同)てをりき歌をよくよみしとや(壬二)「さらちねの宿を隔
 て、かつら川昔はさえむわさりしとや(拾玉)六「ごが心かくさしとやとおもへと
 も見るひとあそる人もあし(宇治拾)十二、ちこのこ、よてあまとありしとやな
 どおもひ出られて
 補 是のよまかるくやと添たる(万)九、廿「おくれゐてをき波也てひむ春霞さ
 びく山を君うこえぬり(同)おくれゐて吾者哉てひむいさ野の秋そぎ見つ、

いさむ子ゆゑに

むや ばよや(古)戀二、小町 「思ひつ、ぬれそや人の見えつらん夢とちりせばさめざらま

しを(同) 戀二、友則 「夕されば螢よりけしもぬれども光りとねそや人のつきをき

そや (古)秋下、ラレウカの意也、此たぐひ猶あり 「心あてよをらそやをらん初霜のおれまどはせる白菊の花 是ハ折

そや 願の(後撰)春下、信明 「あたら夜の月と花とをおかトくはこ、ろいれらん人に見せ イあられ

そや (落くや)四 猶ちぬべきあめり今しはしきてあらはやと思ふ(源 夕うや) 二か

かしと思ふ娘をつらうまつらせそやとねがひ(金) 戀上、成通 「後の世と契りし人もあき

物をいさばやとのいふぞそりあき **補** (貫之)(新勅) 戀四 「こぬ人を月よあさむやぬ

と玉のよことよこれのかげ城たし見む(金葉) 雜上、行宗 「うらやまし雲のかけむし立か

へりふと、びのざる道をいらそや(千載) 戀一、俊頼 「あは江の藻うづもる、玉がしそ

あらはきてたに人をこひむや(同) 同右、大臣 「人いれぬ木の葉のしこの埋水おもふ心を

かきあがさむや(同) 同、有房 「もらさそや志のびもつへき泪りの袖のちがらみかくと

そりり(同) 同、西園寺入道、前大政大臣 「人忘れはおもひの色れしとぞめしがる涙の袖を見

せそや(同) 同、為氏 「もらさそや山もとりけてせく池のいひ出がたき心ありとも(同)

同 為經 「つらしともいひて心やあぐさむと一のばでたしも人をこひそや(同) 戀二、雅有 「

ちらせむや人をうらみのこひでろも泪かさねてひとりぬるよを(同) 同、よみ人、老らす 「う

れものところれよあしうらみそやつれあき中の有明の月(玉葉) 戀一、延政門院、新大納言 「見

し夢城が心よもどそれそやとそせがさりにいそれもぞそは(和泉式部集) 「あふ

ことの何のりひあき露の身をかへそやかへむ露の命を(和泉式部日記) 「いまま

るまこそやとあり(万代) 和泉式部 「世の中にあるしよもあらせられる身をちらせや何の

つとのむくいと(拾玉) 六 「世中に有る非とさとられて世よあるよどの世ようまれ

そや(同) 「旅よいで、物のあそれぞいられけるこれをまことの道よあさそや(か

けろふ日記) 「さ、がよのいりよあるらんけふたよもちらせや風のよざるけしき

を(新後撰) 戀三、素還法師 「いつそりとおもひあがらや契るらんちらせや人のちよこのこ、

ろを(續千) 夏、國冬 「螢とおおやろの清水かそりよもちらせやおのがもゆるおもひを

(同) 釋教、慈鎮 「とちるべき道のさけがよあるものをいらそやとたし人のおもそぬそや

な (千) 戀四、般富、門院大輔 「見せそやあそまのあまの袖たよぬれよぞぬれしいろのちは

らむ **補** (新後撰) 戀一、院御製 「見せそやなくさけて思ふ泪ともよし玉のか、る袂を

そやむしり 早走 (平治物) 二 大力の剛の者早走りの手さ、あり

名おそろしき物、**とやち** 補(相模集)「**とやち**ふくまげとの野らの草かれやおきて
いささるふせばうさよる**とやて**」(竹とり)**とや**き風ふれ世界くらりりて 云々 **とや**
ても龍リウのふかきるかり(夫)十九、爲家「波いらむ沖の**とやて**やつよりらゝ生田が磯よ
そるとも舟

とやりを(平家)五院中の**とやり**をの者ども(盛衰)七卅**とやり**をのさりもの廿五騎云

とやりか いづれも心のすゝて物深うらぬ也聲のハヤ言物かく事などの手ハヤナ
ルをいへり又次の はやり心に同くあふめくともいへり又琴笛にいへるの
ウイタル調子といへるウ又 (源と、き、) 卅 聲も**とやり**りにていふやう 云々抄に利
手のセハシク急ある意り

(同竹川)十こまのらさうおそ**とや**あど**とや**りかにいふもあり(同 口ウカ) 上八文
とやりりに**と**りかきて 歌云々(同 末つむ) 七女君の御めのとを侍従とていと

とやりりなるさり人いと心もとあくかさもらいさーと思ひて(同 紅葉の賀) 廿人に
いたがへばそこ**とや**りりあるたはふれでとかといひり**と**て(同 句ミヤ) 三十心
まりせて**とや**りりあるまき事をさー好まき(同 東や) 六十 田舎ひたるされ心もて

つけてまか**と**ーしからせ**とや**りりからまーくバ(同 同) 五 **とや**りりある曲ジの物あど
をーへて

とやりて、ろ(源 末つむ) 四さるべきよてかりにもおのいかよんをとがめ給ふべ
き人あーなどあどめささる**とや**り心ハ打思ひて

とやる 心のそ、 **とや**る馬 いささる (うつろ 國もつり) 四 下、廿 御さいまつともいこた
いて**とや**る馬のりをりま**と**てお**と**まる 敬語也 (平家) 五 廿 ひろミへ出
て軍をせんと**とや**られけれども **とや**りて(うつろ 國もつり) 中、五 面白き手をあそバ

い**とや**りて人のありあーもろーめさき(枕) 七 むとくなる物、こま犬ーて舞ふも
の、面白がり**とや**り出てをどる足音 興よの (落くる) 一 此ころ御心そり出てけ

さう**とや**りたりと見ゆやとの給へ 好色の方よ心の (うつろ 國ゆつり) 中、五 兵衛の
君ハこめささる人の 云々 いとさう**とや**りかれさり(同) 三、五 十 あて君もそれにぞ似

さるそれい**と**と**とや**りされさり 補(大鏡) いとら**とや**る馬よて(同) ミか人まろー
めいたらめと物を申**とや**りぬればさを侍る(著聞) 十六、四 世中ハ強盗**とや**りたりけ

る時 此詞(松の落葉)四、三十七丁よ 説あり例と多く出せり可考合 **打とや**る(狭) 三、上、廿二、今姫君 よからせあやー
ささりきものどもの集りて人に打**とや**りありつりぬあめり(同) 四、下、四十、今 何事も

あらーく心**とや**りて打**とや**りたる人がらなればぞりー

とやる 是ハ轉トて時 (大鏡) 堀川の攝政の**とや**り給ひー時ハ此東三條殿ハ御つりさ
めく事といふ

をもとめられさせ給ひていとくらくおのりまゝ、時よ

そやを 早緒(枕)十二 そよにさてるものどもこそ目くる、こ、ちそれそやをつけて

のどりにそけさる物のよとけさよ 抄早緒をつけさるたえかば何よりいからんふと

落いりあんをそれぞよいととらふとくかどもあら 抄早緒也舟の櫓は **はやをの綱**

(夫)侍従 卅三小 「五月雨よそやをのつあはくちはて、汐よひゆる、舟ぞあやふき(山家

上) 「たぬとつ、そりのそやをもつけかくよつもりよけりかこーの白雪 是ハッリ

そやさ 早業(續世繼)六十 そやさをさへからひかく給ひけれ

そやせ 早早(堀川)苗代 「それもてゲ門田にう、るそやせの苗代水をいりせひ

りまゝ(拾愚)上 「たぬまきいむろのはやせおひよけりおりたつ田子のあめもい

と、に○早稻(和名)和勢とありたぐさ ねいへるにて同意あるべし

そやか 早川(方)のい水早き川あるべく(夫木)(万)十四 「うつくしと我思ふ心早川

のせけとせけども猶やくづれん(同)廿九早川よあらひせ、ぎ(夫)廿四 信實 「そや川の

せけりあやふき舟とさりそりひよむらへ道遠くとも(同) 安嘉門院四條 「あづまぢのゆさ

りをこえて見とせせばおそぎなぐる、そや川の水

そやたつ (八雲)上 河そやとつといふ(堀川)川肥 「淵瀬をもそこともいらぬそやと

つのもおぎりとさる川のな、れ ガイ

そやらか 常の早く(宇治拾)三 車のゑりに此つ、とさるをいれて家へそやらり

にやりて 馬といへり(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやむ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

そやめ 今と同大方(夫)九 寂 真柴とけそやむる駒は驚きて木さうくうつるせ

ろのありけり何よりてりひせもくらさん(千載)仁法師「おろる川とせせの瀧
 に身をあけてそやくと人にいせせてうぐな(著聞)二事の志さいをとふにそやくぬ
 人ありけり(枕)四雪山の所もさせてやりつるものひれさけてそやううせ侍りまけり
 といふに(宇治拾)一よべあけひーのそやうそのへんにある下人のかぎりに物いひ
 きかたとしてそやう(うつ布 樓の上)一此宮の御母方もそかれ給ねばそやうちう
 て時々見奉りーに(枕)五廿そやうおろきさいの宮にゑぬたきといひて名たりき志
 もつちへかんありける(源)七(七)そやうまさいとけらふに侍りー時(うつ布
 くら開)上七かの君も今の世つき給ひにければ云々そやうかうてこそおろせや
 りりけれとさん思ひ給へりー(枕)三五十糸さき物、とみの物ぬふにぬひもてつと思
 ひて針を引ぬきさればそやうをむせりけり(同)ゆさけの方の御身をぬひ
 つるがそむきさまあるを見つけせ云々御せあへせんとそればそやうたがひにけり
 (源)玉うつら)廿御方のそやううせ給ひにきといふま、に三人ががらむせりへれり
 かけろふ日記)廿七そのこよともーつる火のそやうきえにけり(大和物)一侍讀
 にてまーける大とこのそやうをにけるがむろに松の木のかれさるをきて(同)
 六此子も忘れを思ひもたりけり(男の帯)男のそやう忘れにけり(源)そやうは(源)そらひ

一卅 尼君そやうの今めきたる人よぞありけるなぞりなるべー(こ、ハモトハ)そやく
 ぞ(古)戀(貫之)下「よーの川岩波たたく行水のそやくぞ人を思ひそめてー(カラム
 カシカラ)はやくも 常のはやりの所に出たるに(そやくより) (うつ布 吹上)七下
 の意也 大方此過去の意とふくめり (そやくより) (うつ布 吹上)七下
 行政もそやくより承りて出さち侍るをいとまの侍らねばなり(躬恒)卅「音にきく
 いせの鈴鹿の山川のそやくよりこが戀さる哉(かけろふ日記)上十九 涙の川のそ
 やくよりかくあさまさき中故に(サイ初カラムカシカラ)そやくのり(土佐
 日記)そやくのかこの子(そやくの事)古事)上五 思其初事(源)玉うつら)廿「初瀬
 川そやくの事(をらねどもけふのあふせに身さへなりぬ)そやく(是ももとの意ハ
 元來ガ云々ヤ(今昔)震且 俄舟十余出来ぬいりある舟なるといふ事ををらざる
 ワイの意あり)そやう(源)よもさふ)八見こ、ちさる木さち哉と覺をへそ
 やう此宮かりけり
 そやく(そやう) 是ハ常のと同じなれど下知も願 此意の(そや)も己よ出そ(兼もり)「
 旅人のせりもそこでもむかききをそやくいまいね山のとねさち(後撰)三「つきも
 せせうきことのおおるるをそやくあらーの風もふかかん(そやう)(かけろふ日
 記)廿六(下中)そやくとしてえんよのそりぬ(云々)そやうといへばるさりよりて(うつ布)さく

のえん（下猶）とやう参り給へ（同 吹上）^{上十} ことひつらうまつらざらん何れせん
とやうつかまつれとの給へ（後撰）^{戀四} 大島水をそこびり
とや舟のとやくも人よあひ見てしりあ（後撰）^{朝綱} 大島水をそこびり
りて詞（後撰）^{朝綱} 大島水をそこびり
とやうく（後撰）^{朝綱} 大島水をそこびり
いと腹たちまさ

とやま（神代紀）^{七十} 麓山此云麓耶磨（新古）^{戀一} 筑波山と山しけ山しけ、れと思
ひいるにいさへらざりけり（源）^{やどりき} 初つくも山をさけ見まよしき御心のあり
かからは山のしけり迄あぢち思ひいらんめいと人聞かろしう（夫）^八
家ミトウき夜のともし「いさづらにゆく一の數やあまるべきとやまをいれ鐘聞
ぬまり（万代）^忠 「ともしけるとやましけ山かきさけて鹿をやふりくおひひる
らん（はやまの原）^{堀川}^頼 「ともしけると山の原よさつ鹿のめもせぬよをうら
てぞふる（はやまのそそ）^{（月清）} 「あらふく露のかことも數をひてとやまのそそに
やどりとびぬる

補 とやま（宇治拾）^{十一} おふもの、とよりとやまりてえとゞまりあへせ
とやふね^{早舟}^{（和名）}^{三十一} 舸漢語抄云 高尾舟一云戰士可乘之輕舟也（後撰）^{戀四} 朝綱「大
島に水をそこびりとや舟のとやくも人にあひ見てしりあ（夫）^{廿三} 卜「大島や波間

にいそぐとや舟のそに出せりて戀ささる哉（宇治拾）^{六廿} 弓矢さいしる人百人と
や舟のりて（源）^{玉うつら} 四とやふねといひてさまことよかんかまへとりけれ
思ふ方の風さへそ、とてあやふき迄そしりのせりぬ（新後拾）^{戀四} 天皇「こと浦ま
心をけしかそそより跡までしらぬ中のとや舟（新續古）^{釋教後九條} 前内大臣「西の海みち
ひくしそにまりせつ、それとはさ、ぬ法のとや舟（万代）^信 「むろの浦のせとの早
舟浪さて、かそそよかくる風のそしりさ

とやぶさ（和名）^{十八} 鶺鴒八夜 鷹屬也（音算訓）^上 同鷲鳥也（仁德紀）^七 歌曰破夜歩佐
いあ光よのせりとびりけり（拾愚）^上 「風たちて澤邊よりけるとやぶさのはや
くも秋のけしきなるか（新拾）^廿 物名とやぶさ

とやて（和名）^九 説文云平地有藁木曰林（源）^{よこぶえ} 三 御寺のかさならち
りき林にぬき出さるたうな（壬二）^{林首} 「あさみどりこり葉の梢名にさて、夏
はとやしと色し見せけり（順） 秋の野しいろくの花もとちちりま
がふ林のもとよあそぶ人あり（月清） 「もとちちくあらしよつけて聞
ゆかり林のおくのさをしりの聲（新千）^{釋教} 「あらふく春の林の朝平

とやち（和名）^九 説文云平地有藁木曰林（源）^{よこぶえ} 三 御寺のかさならち
りき林にぬき出さるたうな（壬二）^{林首} 「あさみどりこり葉の梢名にさて、夏
はとやしと色し見せけり（順） 秋の野しいろくの花もとちちりま
がふ林のもとよあそぶ人あり（月清） 「もとちちくあらしよつけて聞
ゆかり林のおくのさをしりの聲（新千）^{釋教} 「あらふく春の林の朝平

とやち（和名）^九 説文云平地有藁木曰林（源）^{よこぶえ} 三 御寺のかさならち
りき林にぬき出さるたうな（壬二）^{林首} 「あさみどりこり葉の梢名にさて、夏
はとやしと色し見せけり（順） 秋の野しいろくの花もとちちりま
がふ林のもとよあそぶ人あり（月清） 「もとちちくあらしよつけて聞
ゆかり林のおくのさをしりの聲（新千）^{釋教} 「あらふく春の林の朝平

らけ花は常かき世にいられつ、冬のはや一(万)二、卅と雪ふる冬の林は云々橋の

や一(同)廿、「橋の林をうゑん郭公常は冬迄をわらるるがね花のはや一松のはや

一紅葉のそや一(いせ物)六十「きのふけふ雲のたちまひかくるふ花れそや一を

ういとかりけり(うつり吹上)七、十松は林を町をり云々花の林を町をり云

々もとちの林云々竹のそや一(夫)正仲「風ふけば竹の林の友せりにふいやわづらふ

よその鶯そ一のそや一うこのはや一のたぐひ上のかかの部は出せ

そや一早(万)一(かけろふ日記)四下上、日ころいと風そや一とて南おもてのかう一

あけぬそはやき(竹とり)そやき風ふき世界くらりりて(古)冬、冬るまち「きのふと

いひけふとくらして飛鳥川流きて早き月日かりけり(源梅うえ)七三くさある中に

梅の花花やうよ今めりうそこ早き心いらひをそへての事也(孟津)句ひのそ、

そやき(新後拾)為冬「よ一の川水の心も今更よそやさしらる、五月雨の頃そやを

ハヤサニの意也を文字そへぬもそへ(万)十五、「うらまよりこぎこ舟を風波夜美

たるも同意ありを俗のガの意也(万)十六、「うらまよりこぎこ舟を風波夜美

おきつとそらにやどりそるりも(清慎公)「いくりさめ定えなき世の水そやと小舟

をさをのさをやいづこぞ(六帖)三「くさら川川瀬をそやとあが駒の足のそ、ぎま

ぬれてける哉はやく(宇治拾)十三、方つよく足そやく云々(山家)上「うら雲の月の

おもてより、れどもそやく過るうれかりけり(千)釋教、「ながき夜もむな一き

ものときりぬまばそやくあけぬるこ、ちこそをれはやくぞ(新後撰)夏、信「さを棹

の水のとりさの高瀬舟そやくぞくさを五月雨のころそやくも(續千)雜体、「賤の女

が泥ふれ衣の秋あはせそやくもいそぐつちの音哉ハヤウ支タ。マヒロカ(新古)

冬、後徳大「石をさる初瀬の川の波枕そやくも年のくれまける哉(續古)戀五、「いさ

寺左大臣「そらにひく汐のそやくも人の遠ざかりにマモ。アリ、大方過去の意

意をふはやけれはそやうらんなど動うい。下知又願そやくそやうも

くめりはそやうそやうそやうそやうそやうそやうそやうそやうそやうそやう

出せ。過去をそやくそやうそやうそやうそやうそやうそやうそやうそやう

そやひと隼人。又といとともいへり、其猛(神代紀)卅諸隼人等至今不離天皇帝

之傍代吠狗而奉事者也(隼人式)に今來隼人發吠聲三節をどくハ一くといえと

(職原抄)五、卅兵部省隼人司、正一人諸大夫任之云々(万)三、十「隼人のさつまのせと

を雲るをそとそくもこれにけふ見つるりも宣長云此隼人ハ國名あるべし隼人國

の名よあらば隼人の國の内の地名也ハ續紀見也此時ハ薩摩ハいまど國

そやもそやの所よ出せ

そやせ早瀬(夫)十七、「大井川のせきの水や氷るらんそやせまを一の聲くさるあり

(玉) 冬二品法 親王覺助 「瀧川の岩ねつゝきや氷るらんをやせの波の音のよされる

そやそ 今と今と 令生意也 そゆる 別は(夫)廿九源 「あめこめて岡邊ははや栗柴の年をそへ

てもいける頃哉 はやい (うつ布) とくけ (森をそやたらんやうよ) 云々 はやせる

(永久) 顯 「賤の男がかりてそやせる岡つゝ若枝は花の咲よける哉 補 (万) 十四

かみつけぬさぬのくゝたちをりそやいあれはまごむることこそとも そやそ

そやそ 今と今と 音曲ももて そやそ そやい (盛衰) ちの段 むりより 五節えんを

いの肩ぬぎには必かくはそやそを 云々 さもなくして俄に拍子をかへていせ平氏の

をがめありけりとそやいとりけり 補 (かけろふ日記) 走井はこれり馬うちそや

して(うつ布)よろつのがくふえのねをそやいもろいのおもいろき聲をとのへ

たり(まけろふ)さけりづき花ののるとりそやいして そやさる (狭) 三上廿一ふ

うへりそりひき給ふに 云々 おとあ げ唱歌をるにそやされてりさけりへい

おなといかこまろにて時もや、かそる 云々 聞そや (源) と、き、 (廿三) 今一 聲

聞そやそべき人のある時手なのこい給ひそ はやい (宇治拾) 四、十 いりぞり心

にいらんと思ひこる郎等の 云々 い りぞり味ひまさらぬやうにあらんかとそやい

ひけり とりはそ いひそ 見そ もて の 上のか 部に出 とやそ

おらしむ る意也 そま 濱 (かけろふ日記) 中、上 ゆ きすぐればそる と そま 出ぬ はま 濱 (宇

治拾) 七 され ば こ る べ き や う も あ 濱 ま に 打 立 て は ま べ 濱 (貫之) 上、三 そ

まべよて年ふる人の若ら波のとも白くぞとえととりぬる(かけろふ日記) 中、上、十

のゑの そま べ い さ り び と も い つ り 舟 か と あ る 所 は ま づ ら 濱 (後撰) 秋 下 人 々 も ろ

とも濱づらをまらる道に(拾) 雜 云々 濱 づ ら に 貝 の 侍 り け る を 見 て は ま あ り 濱 中

(新六帖) 三、信 「はまかり い 汐りせそりおとづきてかたよりかきあまの宿哉

はまち 濱 (壬生) 下 「けふ い 又山のともおくなりよけ い ぬそまぢの夕ぐれ

のそら(夫) 十四、千五 百番 忠良 「まくせ そ 眞野のそまぢの夕風にうらみてかへる沖の白浪

補 (玉葉) 旅 忠成 「かるみ ぐ と い せ の 浪 い そ ぐ ら 浦 の そ ま ぢ か る 旅 人

そま ち ど り 濱 千 鳥 を い へ る な り (六帖) 三 「聲を と ま き け ば な ぐ さ の 濱 千 鳥 ふ る を こ

それ 常 よ と ひ こ よ (夫) 廿五、鷹 司院 帥 「う だ め れ と 見 え と これ ば 濱 千 鳥 思 ひ あ り そ の

浦よ か く な る (後撰) 二 の い は 注 そ ま ち 鳥 の 誤 也

そま ち ど り 是 ハ 文 字 と い ふ 鳥 の (古) 下 「忘られん時 い の べ と ぞ 濱 千 鳥 ゆ く へ も い

らぬ あ と を と む る (後撰) 貞 文 二 「そま 千 鳥 た の む を い れ と ふ と そ む る あ と 打 け つ

あこれをして浪(かけろふ日記)上「たまちどり跡もかきさよふと見きバこれをして浪打やけつらん(同)中上、かへりことと云々「心あるとふとりへまともたまちどりうらにのこを跡へとゞめ、

たまをぎ 濱萩、契沖が説のどとくたッ(万)四十「神風の伊勢の濱萩をりふせてさび

ねやをらんあらき濱邊に(同)十四「いもあつがつりふかそつのみさ、らせぎあゝと

ひとことかさりよらゝも(夫)廿五、萩「よさの浦に一むらさてる濱をぎのあびく方

あき戀もぞる哉 同判の「まきのある汐あひにまがふ濱をぎはよゝとぞとゆるよさ

のうら人 丹後の國也(夫)廿八、萩「たま萩のおひゝ所ふとさけて夕霧がくれさづぞ

かくあは(契沖河社)云(元輔集)に藏人所のこのこと河原にてまゝさゝりま

り出て「ふく風のまゝりりけり草けみ露のいさらぬ萩の下葉も是ハ河原よ

萩とよまれさる大凡もろこゝにの萩萩とつゞけて江のそとりかどよ近きをも作ま

り(万葉)よも「いもあつが云々 ともみて昔よ似さる物のまどさりあふ由よよめり

伊勢の濱萩とよめるもこれあるべしこゝの軒端の萩かともみて水の邊りにいま

れによめま好事のもの、伊勢よは昔を濱萩といひあしてよそには濱萩といえよま

ぬやうになり侍りけんり 以上(八雲)三上、萩の水邊にもあるべし葦のよゝとも

いふ伊勢にの濱萩といふ(古今顯昭注)の花がつみか、る物の名ハ所よもまどさる事

かれバ伊勢の國よは昔を濱萩といひ又榊を玉ぐゝと申さ云々。今案するよこや此頃よ

るへ 補 濱萩ハ濱よ生る萩ある事契沖説の如くな(壬二)寄葦「人心あら磯をみよ折

し 補 るを葦といひあしたるもやいふるき事也(壬二)戀 人心あら磯をみよ折

りねてよそよやねかんいせのたまをぎ。くそしくの窓の小篠又諸説を

たまりせ 濱風(万)一、廿「こぎもこをまやみ濱風やまとある云々(源わかし)十濱風

をひきありく(金)秋、俊「鶉かくまの、入江の濱風に尾花かよる秋の夕ぐれ

たまた 濱田(新六帖)一、光「浦風よ濱田のおゝね打をびきまやかりし不よありぞ

まける(夫)廿二「住吉の濱田の早苗おひぬとてけふぞさつきといそぎとるかり

たまつとまき 濱椿(後拾)賀「君が代ハ限りもあらト濱つハたふさ、び色ハあらさま

るとも(奥儀抄)「君り代ハ云々 徳是北辰椿葉影再改といふ文の意也古有大椿者

以八千歳爲秋以八千歳爲春也されバ白玉つとまき千代かともよめり以上。又(八雲)

椿の所、濱椿非此椿在濱物也

たまづと 濱裏。家づとあど(夫)廿五、「あま人もお物の濱のたまづとを月にあけぬ

と今やいそがん

たまつら 名定がふり或ハ濱に生る(万)十四、「駿河の海おしへに生る濱つらいま

防已あるべしとこり

増補新撰集 卷之六 十一

くろくさ物こそ思へ甲斐、「濱つゞらたえま」をなけりせてくると思ふも
たが心ぞよ補(新拾)行戀四家「つらけれぞるがのうみのたまつゞらくるよのまれに
人ぞかり行(新後拾)桓戀一輪「こひいねとるがのうこのたまつゞらくるよをみ
袖ぬらそらん(万代)昭顯「あふことへさてもあぎさのたまつゞらくるにつけてぞ袖
ひぬきける

そまづら そま の所よ出せ

そまな 濱菜(万)十三 ありそのうへに濱菜つむ(畧解)磯菜といふに同

そまのまさで 濱眞(万)四卅 「八百日めく濱之沙もこが戀にあたまさら先や沖つ島

守(古)序 山下水のたえぞ濱のまさでの數おそくつもりぬれば(同)同 「こが戀のよ
むともつれどありそ海の濱のまさではよとつくそとも(後撰)棟戀二梁「こが戀の數よ
いとらそろとへの濱のまさでもつきぬべらなり(拾)御製 「ちら波の打やうへそ
とまつねどに濱のまさでの數ぞつめれる(新古)賀貫之 「君が代の年比數をば白とへ
のたまれまさでとたれりきけん(大和物)三 「むりより思ふ心ありそ海の濱
のまさでい數も忘れせ (續古)戀二の

そまぐり 蚌蛤(和名)十九 蚌蛤蚌或作蚌波万久理(山家)下 「今ぞいほふとこの浦のたま

ぐりを貝合せとおおふなりけり補(山家)云々 たほぐりをそいで侍るかりと申け
るをきゝて「おあつくひり死をぞさしてそもそまぐりよりいおもよより
あり(同)云々 小よそまぐりかうあそと、み(月詣)源宗光女 「たよりあらはむやのたま
ぐりふと見せよそるらあるとの浦よむむとも(小侍従集)「よそにこそむやのたまはぐ
りふみ、いりあふといあまのぬれぎぬといれ(俊頼集)家綱がもとよりそまぐりを
おこはとてやまおきを上にりさして書付て侍りたる「やまおきをかざしにさせば
そまぐりを井手のあさりのものと見るかな、くへ「心ざし八重やまおきとおもふ
よりはまぐりかへあそれとを見る(著聞)廿 はまぐりをとりけるを(小野宮右衛

門督家歌合)「あさりせい浦を見りくバとつうこのいそのたまぐり色こりりいを
そまや 濱屋(狭)三上、日にふと、び三たびもい草かきつめつ、うらと聞えさせ給

ふさまあまの濱屋にあまりぬべい(夫)延廿五法師 「千鳥あくるかの濱屋の明方に咎も
る月のかげぞさびい(同)集廿七仲正 「契りあれば鶉のたまきたる濱やよまたつの宮
びめかよひし物を
そままつ 濱松(万)六廿 「いさ子ともたまやまよまとへ大とものまつの濱松まち戀ぬ

増補新編 雑言集 卷之六

らん(後撰)春「春ふりき色よもある哉そみのえれをこもみどりよとめる濱松

たまゆか 濱床。或人云帳臺をいふ其室禮のさまの假名装束抄にえたり又(六窓軒

四つ合せて上に疊を一疊まぐめたり四方に帳を垂る柱の床の上四隅は立帳の中に
てひらくやうに一間に二枚ツ、たる也内は枕几帳といふ物を立一の時の枕上に
一文字に立二の時入の形にたつ下の臺を濱床といふ也(つれ)く云々(うつ
昔の陣の座は濱床を置たりとあり今も紫雲殿清涼殿に此床あり人不知云々(うつ
藤原の君)廿四此書の繪にこ、いかんつけの宮女あてかへり給へり御たまゆり
たて、北の方を奉り云々(同 樓の上)下、四 八んぐいのろうにの犬宮のおもい所を

りたまゆりをのぞく大宮の御れうのさやりよせさせ給へる(つれ)六段官人
章兼が牛をまかれて大理の座れたまゆりの上にのりてはれ打かえてふたりりり

補(うつは 樓の上)下、其たまゆりあはるさんせんりう白さんそをさしてらて
んそり玉いれり(雅亮装束抄)きされの宮あどのにたまゆりありたりさ二尺を

りりよつよしてさあはせておく黒ぬりかおもものをうちりそのうへよさしてて
たるうとん二帖を北南よくまをまくらとるなり

たまゆふ 濱木編 (万葉類林)暖氣に應ト生るにや近年植て弄べとも生ひ不繼絶る也

二種あり小さき花幣に帛切うけさるやうに興ある物也大ききる花形壁の如く
にて莖あど丈夫にてまべて草たちふつ、り也葉おもとに似て長く身木の芭蕉のや

うにいくへも白き薄皮にてつ、めり今の草花弄ぶ人多くかやうの物世に目かれた
り今も紀伊國伊勢國の濱邊に多うして他は聞及ばせ云々(万)十四(拾)戀一「とく

ま野の浦の濱木綿百重成心いもへどたはあぬりも(拾)ある(拾)戀四(兼あり)「
さかがら人の心をとくまの、浦のたまゆふいくへあるらん案するに此兼もりの

女君の歌にして初句(兼輔)「とくまの、うらのたまゆふ夕さればこれもひとへに
へだてるとあり

うらとやいせ(散木)上、卅 晚聞郭公といへることを「とくまの、たまゆふりけて郭
公なくねきりせよいくへなりとも(源)をどめ)四十 たまゆふそりりのへとてさか

くいつ、そべておやくうさおれるをいふへだ、さるをいへる中よをと
めのはいさ、うあるへだてと皮のうそきによそへいへる也

はまびと 濱人(續古)雜中、光明 峯寺入道「四方の海むりいにかへる波の上にもま人今やまか
りまつらん(夫)卅三 有長、「濱人の笥屋の床いあれぬらんのせてかへり小車のあと

はまひさぎ 濱楸。體からび但(伊勢物語)に(万)卅八(拾)戀四(いせ物)六段「浪間よ
りとめることまの濱久木ひさくなりぬ君にあはせて(拾)本(いせ物)たまひさ

い(拾)あはせて(いせ物)あひ見て(金)雜下、な、そちよとちぬる汐の濱楸ひさく
世にもうもれぬる哉(月清)「あがめこい沖つ浪間のたま楸ひさくとせぬ春霞哉
(六百番)寄木戀 經家 「涙にうさみやま木もくちぬべい沖の小島のひさぎからねど(

壬生)下「いそき山こえてこぬこの瀧ひさぎひさぎ久かりぬ浪よーをれて(伊勢物語新釋)云。そはひさぎ、真本に志とがふ瀧ひさぎとある本はころし瀧屋といふべく瀧庇といふべき詞にあらば後鳥羽院のおきの國にて「浪まきおきのことまの瀧ひさぎ久かりぬ都へさて、とよませたまへる此物語のうつあやまれる本によらせ給へるよてかここれと御ひがこと也(伊物)古意六廿三丁。廣足ひさぎを瀧ひさぎとよみひがめする其ころのあへての事よて後鳥羽院の御歌をのし申奉るべきよあらばその本書に引さる歌どもを見て知るべし云瀧

そまびさー(濱邊の家をいふう、いづきもいせ物)(續後撰)旗式子「都人おきつ小島の瀧ひさぎひさぎ久かりぬあぬ思ひ(壬生)中「長月や名におふ月の瀧ひさぎひさぎく民の敷ぞとるべき(拾愚)上「四方の海もはふりにぎふ瀧ひさぎ久き千代よ君ぞさきえん(同)下「霜おるぬ南の海の瀧ひさぎ久きくこの秋の白菊(夫)廿五、後九「汐風の吹上よとめる瀧ひさぎある、もいらせ浪のさてる(同)百番家長「君が代にさるるかるとの瀧ひさぎ久ききりけの神のまに〜

そまびめ(夫)廿五、祐舉「秋風の吹ての瀧比也(瀧名)そま姫の夜さむよかれや衣りさ〜くへるう

補(そまび)万(十五、云々)ふねをとめてそまびよりうらいを見つ、云々

そけ 鬚筆(和名)十五、膠漆具、陸詞切韻云鬚音次以漆塗物也、漢語抄云鬚筆波介

そけ 所出也(職人盡歌合)にそけめと云詞あり

そけ 思ひそけ(源)七、おくれさる筋の心をも猶くちを〜く見え

トと思ひそけ(つれ〜)百五十ある人のい〜く年五十にある

まで上手にい〜らざらん藝をばそつべきかりそけとからふべき行末もか(山家)「やととよさび〜らととそけむべ〜烟こめたるをの、山里

そけ 心ざ〜をそけましてはふいとひさふるにそひてさふらひつ

まー給ふ(同)玉葛)十

ほ(同)胡蝶)初かの春まつ園へとそけまー聞え給へり〜云々

補(源)若菜)上九小侍従といふ御ちぬ〜をいひそけまして(うつは藤原の君)をて

そけまー(今昔)つさか〜よわ〜とそけませは(源)玉かつら)人のこ、ろはけ

まさんことをおがねよけ〜らたとのさまふ

そけ 万(今)はけ〜(源)六)から國のそけ〜きけと物のかさち(新古)

冬津守「いつの間をそらのけ〜きのかさるらんそけ〜きけさの木がら〜の風(山家)下「山ふりと槇の葉さくる月け〜そげ〜き物のをさきなりたり(拾玉)「か

ぞかくある(新千) 神祇權僧 正慈傳 「もらさどあごが神垣のこしめ繩をへてもあまる四方

のめぐみの(後撰) 戀 「いせの海よもへてもあまるたかかその長き心のこれぞまさ

れるをへたる(万) 五、卅 墨繩ををへたるごとく よりもへて 糸を様ハ (後撰) 春中、「青

柳の糸よりもへておるををいづれの山に驚りたる 打もへて 打ハ助語にて (古) 上

ねつ 「たかばよにかしつる糸の打もへて年のを長く戀やとららん(夫) 仲實 「ても

をまにひさのかけあを打もへてあまもる秋にかりまける哉 詞はいへる打もへて

ねてよめり 長く打ツバク意あり歌

そふ 人よも虫よもい (古事) 中、四 旬旬廻 (神代紀) 下、廿 旬旬透地 点一旬旬 又さらば

り へり是も今と同 (今物語) 「そふよどにいもがぬりていかりにけり そひくる (枕) 八、三つばかり

ある兒のいそぎてそひくる道に 云々 (和名) 廿五 岐行、唐韵云岐 音岐 虫行也 訓波 (好

忠) 歌の そぞにそふ虫も 云々 (神代紀) 上、四 又 (大祓詞) 共一昆虫とよめり そひいる

そひ出る そひこころ そひひろざる のふぐひあま。是ら萬かづらにも兒虫あど

あり た末に出せ。にも又ふいかるくそへてい

そふ 這まて老をも道の難所をも病をも (頼政) 下、廿 「翁さびそふ」のぞる位

山雲ふむよどにいりであるらん(宇治拾) 二、七 大なる山ありけり 云々 此嫗 老女をい

る 誤り そふ」のぞりけり (盛衰) 十三、高くらの宮の 御馬にとよものせ奉らば 云々

が、として高き山 云々 かくてよもそがらそふ」寺にいらせ給ひけん (顯輔集) 九

月十三夜九條殿にて女院御堂にて和歌のありいにいさる事ありてえ参らぬを殿

よりせめて仰せらるればそふ」参りて 云々 (盛衰) 七、五 夜に入て池の中よりそひ

出てそふ」京へ上りにけり(今物語) 十 かまちをもちてけり 西行そふ」歸りて

けり 俗にハフ」の。是ハ轉トてハ苦」をもコラへ 體といへるに同。テソコ」=其所を立去る意也 著聞) 九 ああかあ」と

てそふ」まけうせけとあん 備

そふ 白粉 (和名) 十四 開元式云白粉卅斤 俗云波。粉シロキ の次に出一さり (榮御

もさ) 三 あやしささま」さる女どもくろくろいねりきせてそふ」といふ物ぬりつけ

てかつらせさせて 是も白ひ物と同く俗

そふ 祝 (職員令) 四十 祝部謂爲祭主賛辞者也其祝者國司於神戸中簡定即申大

政官(万) 七、四 「とぬさと三の祝がいそふ杉原をと」くにてをのとらえぬ

(鎌倉右大臣集) 七 「今つくる三のそふりが杉やうろそぎに」事のとそぎともよ

一(千) 神 片岡のそふりよて侍りけるをおかト社のねぎにこらんと申ける頃 云々

賀茂政平(抄) 片岡の賀茂八所の一所也、祝、禰宜其位差別あり禰宜にうつらん事を

願ひいと也

もふりて 祝子。巫女とも（拾）秋（万）十五「もふりてがいとふ社のもぢぢもぢめ

とバこえてちるといふ物を（万）祝部等（夫）九（夫）九（夫）「夏くる、日數もそぎのしるしと

てとこのもふりてとぬさとるら（後拾）神（能因）「うと瀆に天比羽衣むらきてふり

けん袖やけふのはふりて（補）神（能因）「とづぐきにくちあし色の衣きて紅葉にま

とる人やもふりて

もふり 葬。詞也（万）五（万）神葬伊座而（雄畧紀）九（視喪者）持統紀（十）賻物（いせ物）

段 卅九 そのまじりて給ひて御もふりの夜（云々）御もふり見んとて（はふりて）（大和物）

四、云々 志にけり（云々）あきの、しりてもふりて

もふり 葬。用也（もふりて）宇治拾（十二）あくくくもふりてける（著聞）十五（其後薪を

つとてもふりてうへ石のそとををとてたりけり（もふりける）今物語（八）さてのこ

あるべきからねばもふりけるに其火は此女飛入りて（云々）（万）下の葬の用の語也

もふる、本語の自（もふる）あるべ（もふらりて）ハステヤ（もふる）ハステヤ（もふれ）ハステヤ（もふる）

ニナル意（もて落ぶれといへる）語意かまへり自（源）東や（五十）かうまどハもふる、

他のうされるのまてもふらりても是も同意也（源）東や（五十）かうまどハもふる、

やうはもてあそこと、いとどけれバ

もふれ 源 四、る道のそらにてもふれぬべきにやあらん

れて（大和物）二 といさうかづきけるを親かくかりて後とろくもふれて人の國

にそりあき所はそとけるをあはれがりて（もふれん）源 玉うつら（六）されさへ打きて

奉りていりあるさまにもふれ給へんとあらん（もふれまどふ）同（せきや）六 此人にさ

へおくれていりあるさまにもふれまどふべきにあらん（もふれうせ）（かけらふ日

記）（下上）今もふれうせにけんところを見しうかうある迄見ざりける事よとて打を

られぬ（ももふれ）（うつら）（國ゆつり）下、たぐるしく覺ゆるハ（云々）心と世の中に

ももふれて御門后のおもてをふせる事との給ふかれバ（云々）

もふらりて（崇神紀）八 屍骨多（溢故号）其處曰（羽振苑）允恭紀（十）志摩瑠波夫利（古

事）（下十）波夫良バとあり（續紀）卅一 大臣之家内子等（乎母）波布理不賜失不賜慈

賜（波牟）起賜（波牟）恤賜（波牟）意（同）もふらりて（源）紫（五十）心にまらせてゐて

もふらりてつるをめりと（云々）同（あらし）初 かくあがら身をもふらりてつるにやと

心ぞろう覺せと（同）玉うつら（六）さる君をさるもの、中にもふらりて奉りてハ何心

ちりせま（落く）一 よるいりにさむらんと給へハ北の方（詞）常にさせ奉れど

さん(源)二十身のいとづらにそふれぬべかりし頃平ひかどとさまかうさまに思めぐらし、に命をもとづからせてつべく野山の末にそふらりさんに云々補(源)明石七せむろある事にて身をそふらかき

そふらさト不也意右右に同古はい興風(六帖)四「身はせてつ心をざにもそふらさトつひに命也あせも動うしいふべくや

そふく羽とふる附そふる長秋詠藻下「をーのる池の氷のとけぬくおのがそふくや春の初風是の風のふくにいそふき(好忠)首十「をー鳥のそふきやとめささ

ゆる夜の池の汀になく聲のそる(更)か日記五十池の鳥どものよもそがら聲とそふきささく音のそるに打そふく(夫)廿七和「打そふく浪の上をばきぬあるにそが

くれるる鳥のえぬ(古)夏「さつさまつ山郭公うちそふき今もありかんそこのふる聲(後撰)庶明「いにへも契りてけりか打そふき飛立ぬべー天の羽衣(夫)

二定「あら玉の年の初聲打そふき朝けのうらにさるる鶯(躬恒)長歌 せね打そふき飛そぎてそべて打の助語あり

補そぶり羽振(万)廿九云々かくほと、ぎすたちく、とそぶりにちらす藤かみの云々(月詣)宮内卿「心ありてそなにうつれ鶯のそぶりにちるもをーきまほひを

濱臣云そぶりの羽振よてそぶきといふも同一そふきのそぶりの古言也山振とかきて万葉にヤマフキとよませたり

○附そふる霧(和名)十八霧波布流俗云波豆々 飛舉也(文選)吳都霧同霧鳳霧霧於霧標(同)射霧霧(万)十九羽振鳴あぎ(同)二打打霧振霧鳴霧とも云々案

そうつそねうつそふるそとく共同但(万)の後そふるそとくいへるいま見及バ(万)十八朝羽振風社依米夕羽振流浪社來縁又(同)十六朝羽振浪の

おとささぎとある(万葉類林)云 鳥の羽をふるごとく浪風のふるふ也(文選)江賦よも八風不翔とあるも同く和漢意通して用る云々

そぶく省俗同省器そる意又除き捨る意又俗のそぶき源まき一ら廿八男踏六條院に此とびの所せとそぶき給ふそぶらせ源ら五下事どもそぎせて、

世の煩ひあるまどくとそぶらせ給へと限りありければめづらりによそそくか

んそぶらせ同帯木七家の内にたらぬ事とそななりめるま、にそぶらせまむの

きまでもてかゝづける娘あどの云々そぶく(同)あの一更に後のあとの名をそぶくとともたけき事もあらトそぶき同あけ九十いりて人のそりをも恨をも

そぶきて京にうつろそしてんとおそはそぶきせて(同)タきり一廿 あかがちよ人の

つきものそこぶふあせのかけそしに駒のひづめの音ぞとえせぬ(著聞)十九其から
そそのををそこびて(大和)かきとらひもてそこびいく(そこぶ心)拾玉六「大寺の池
の蓮の花さのりそこぶ心よたむけてぞとる(夫)九

○そこそせ(著聞)二十 其外靈験の各地でとに歩(歩)をそこばはといふ事をし(そこば
せ)る(命)運(あり)せ(せ)ふ(な)どい(拾)屏風(秋)翁(の)稲(を)こ(は)る(か)さ(り)ま(て)侍(り)ける
所(は)そこ(を)る(源)九(上)冊(の)院(より)も(御)で(う)ど(な)ぞ(と)こ(を)る(そこ(を)る、)れて
あ(ど)敬(語)も(も)か(の)づ(ら)ら
せ(ら)る(よ)も(い)ふ(べ)い

○そこび(枕)七廿 御物のぐそこび云(そこび) (後撰)朝綱「大島に水をそこびいそ
や舟のそやくも人にあひきてうがを(そこび)出(夫)二(仲正)鶯のねぐらによるのをさめ
たる聲朝な(そ)そこびいづなり(源)七(む)七 皆かの宮はそこびこ
と(そ)そこびあぐる(榮)ね(の)月(八)た(此)牛(一)つ(て)そこびあぐる事をしけり(そ)こ
び(お)く(拾)十(大)嘗(會)風(俗)「う(で)き(な)き(岩)藏(山)は(君)が(代)を(そ)こ(び)お(き)つ、(千)代(と)こ(を)つ(め

そこびかへ(拾)戀(雑)不(ど)なく(て)う(と)も(を)そ(こ)び(か)へ(し)れ(ば) (そこ)べ(新)六(帖)
信實「そ(や)そ(ま)べ(門)田(の)西(の)駒(の)足(い)お(お)せ(鳥)の(聲)い(そ)く(かり) (そこ)べ(る) (そこ)び(け
る)の(約)也
そこ(は)ん(な)ど(い)ふ(べ)い

そで(葉)新古(雑)中「和歌のうらを松のそでしにながむれば梢よよるあまのつり
舟(夫)九(崇)德(院)「あ(ぢ)さ(る)の(よ)ひ(ら)の(八)重(に)と(え)ぬ(る)そ(で)し(の)月(の)う(け)よ(ぞ)あ(り)と(る

そえ(生)そえて(な)ど(い)ふ(べ)い(そ)め(の)所(よ)注(と)
そえ(体)の(語)也(夕)ば(え)又(俗)の(何)ハ(エ) (そ)え(も)と(え)ぬ(枕)十(四) (あ)ま(ひ)も(と)え(ぬ)き(ぬ)ぞ
ガ(ス)ル(と)い(へ)る(ハ)エ(の)意(を)り (そ)え(て) (そ)め(の)所(よ) (そ)え(あ)る(ま)ト (源)末(つ)む)
も(な)ど(あ)れ(バ)露(の)そ(え)も(と)え(ぬ) (用)の(そ)え(て) (そ)め(の)所(よ) (そ)え(あ)る(ま)ト (源)末(つ)む)
六(見)ら(ん)人(は)こ(を)見(せ)め(何)の(そ)え(あ)る(ま)ト(き)と(り)と(同) (タ)き(り) (九)お(れ)ま(と)ひ
と(れ)ば(い)と(ぞ)く(ち)と(し)き(い)づ(あ)の(そ)え(あ)ら(ん) (そ)え(あ)く (源)と(き) (一)廿(そ)り(な)き(花

紅葉といふも折ふりの色あひつきなくそりト(からぬ)露のそえなくきえぬる
とざかり(源)竹川(十) 姫君の院へ参り給はん事(此)きんとちぞ猶物のそえなきと、
ちこそそべりめれ(同)廿八(院)の男(君)生(れ)給(ひ)所(よ) (お)り(る)給(ひ)ぬ(世)を(ら)ま(し)く(ら)い(り)に(り)ひ(あ
ら)ま(し)今(の)何(事)も(そ)え(な)き(世)と(い)と(く)ち(と)し(と)な(ん)お(ほ)し(と)る(同)末(つ)む (廿)い(と
う)も(れ)そ(く)よ(り)に(て)何(の)そ(え)な(き)を(ぞ)く(ち)を(し)ら(お)が(れ

補(と)え(魚) (和)名(抄)鮓(波)江(俊)頼(集)「ふ(し)つ(れ)お(と)ろ(の)下(に)を(む)と(え)の(こ)ろ
と(さ)か(き)身(と)い(し)せん(山)家)「こ(そ)え(つ)と(ふ)沼(の)入(江)の(も)の(し)人(つ)れ(お)り
ぬ(ふ)し(よ)ぞ(あ)り(と)る(著)聞)「そ(え)と(い)ふ(ち)ひ(さ)き(魚)を(一)つ(二)つ(と)り(て

【**とえど**】ある也 (枕)杖の所三 粥うちあてさるハトウ興ありと打笑ひさるハい

【**とえど**】とえど (同)十九ノさけにぎやおもをなどしてふいをかさる

【**とえど**】さつくり出給ふとふりぬる人くるハや○とえど (源)廿九ノ物のとえどハい

【**とえど**】おやとる折ハも云々 (同)廿四ノ院に参り給へんハと行末のとえどハいからぬを

【**とて**】堀川の注八手とかくう稻をかけてや垣也又垣の (好忠)五月「山賤のハとてに

【**とて**】やうに柱をいれちかへてたてさる物ありといへり (源)宿もせよハ門で朝でと稻を不

【**とて**】よりのとてとゆひてぞかくべりぬる

【**とて**】果。終りて俗のシマヒの意 (てて) 又 思ててぬ 見ててぬハのたぐとつ

【**とて**】附所ハも (てて) 方 (てて) 日 (てて) 月 (てて) とき (てて) ぬ (てて) 思ててぬ (てて) 見ててぬ

【**とて**】ゆきかくれ云々 (夫)廿五「もるりなるなちの濱路を過てこそ浦と海とのとてハい

【**とて**】えけれをハテといへるハ同 (古)下「のこりなくちるぞめでたき櫻花ありて世の中ハと

【**とて**】てのうれればハとてハ (古)貫下「なきとむる花ハなれば鶯もとてハい

【**とて**】物うくなりぬべらなり (續古)春上「たが中に遠ざりりゆく玉づさのハとてハいたえぬ

【**とて**】る春のかりがね (古)「ねぎことをさのハ聞ん社こそとてハいなけきの森と

【**とて**】かるらめ (千)釋教「定あき身の浮雲によそへつハとてハいそれよぞありとてぬべき

【**とて**】(後撰)三「つれあさを思ひ忍ぶのさねうづらとてハいくるをいハとふありなり (金)

【**とて**】行宗「いりよせんうき世の中よすまがまのハとてハい煙とかりぬべき身を (蜻蛉日記)

【**とて**】上とてハいうこのハいりハ子さへハぬ物ハはハてハて (古)物名ハとをハとめるをハとて

【**とて**】よて云々ハ僧正「花の中目よあくやとてハいけぬハ心ぞともハありぬべらあるハはハてハい

【**とて**】とるぞえりおき給へるハい (てて) 度 (千)中石山ハとさびハいハまうで給ひぬるをハとて

【**とて**】のさび云々 (てて) 春 (躬恒)上ハとてハいハ歌云々 春のハとて 夏のハとて 秋のハとて

【**とて**】以上 (六帖)の題ハも (古)下春のハとてハいハ哥 躬恒 「けふのハと春を思ハぬ時ハさよも

【**とて**】とつ事やまき花の陰りハいハ月盡也 年のハとて 申のハとて 申のハとてハいハふハべハい

【**とて**】とてハいある 万ハい (蜻蛉日記)中上巳の時ハとてハいハありハいハさりハいハ云々 申のハとてハいハり

【**とて**】とまりハいハさり 身のハとて (蜻蛉日記)中ハか、る身のハとてハいハきりハん人 命のハとて

【**とて**】(同)下上 いろでいハやハからハざらん人ハの女子一人とりてうハいハろハもハせんハひとりある

【**とて**】人をも打かハらひてハいハ命のハとてハいハもハあらハせんハと云々

ひけれどおとしもさてせ又やがておさまとゞめ給ひける 云々

おさま 鏡刀よて髪をきる也 **源** 若菜 下七 いむ事の方もやと御いさきある一バウリ

おさま て **おさま** ハサマシ **宇治拾** 九 尼よからせ給はんとして 云々 めでたく長き

御髪をかき出して此上人よおさませらる 云々 おさまとて、出あんとする時 云々

紙あどよる
いふべくや

おさま る **おさま** り **白文** 五十 孤城保全介干險中 云々 **古事談** 六 前生の鬮體岩介

は落おさまりて候 云々 是のかのづうらとさ **おさま** る **おさま** り **おさま** らん **お**

おさま れる おど動ウー。いふべし **おさま** る レタルハ己は出ス

おさま ハヒの意也 **武烈紀** 三 あをよよ一奈良の婆婆摩に **皇極紀** 十六 谷此云波左

麻とあるも意の同一 **物のおさま** **源** 東や 一 廿二、ゆうくして物のおさまよりこれバ

お そのおさま **同** 若菜 十八 かのとまのおさまもさるべき事りの **お** そのおさま

同 空蟬 三 やをらあめと出てすこれのおさまより給ひぬ **大和物** 下とこれの

お さま **屏風のおさま** **源** 柳 廿 御屏風のおさまよりつとひ入り給ひぬ **同** 東や 六 屏風

のおさまに給ひぬ **伊せ物** 段むう一男後涼殿のおさまをわさりければ。 清涼殿

あされる殿也兩殿の間 **門のおさま** **大和物** 一 門のおさまよりいひいれける **新六**

二隣 **信實** 「心ある宿のあさりの中ひがき文のかよひのおさまやいあま 是の垣は **岩おさま**

新六 一 **信實** 「五月雨は瀧もあまりの水もとり所もおろぬ岩おさま哉 **山おさま** **同**

同 「山おさままきびくた、む岩くどに年へてされぬ瀧の系哉 **公任卿集** 「木の

とをさぐくやうくぞこのとけるおさまがらこそ雨ももりけれ **新古** 戀二 「むるく

ある岩のおさまよひとりゐて人めおもむ物おもむや **源** 楨柱 廿 せいらのひこ

れさるおさまよかうがいのされいておしいれさまふ

お さま **鉸刀** **和名** 十四 **鉸刀** 波佐 **源** 夕霧 五十 御おさまとやうの物の皆とりかく

して **同** 手習 七 七 おさまとりて櫛の箱のふささし出されバ **狭** 十三 四 尼よありな

んと思ひ給ひて櫛の箱なるおさまをとり出て髪かいこして見給ふ **お** さま **箱** ハサ

いる、**阿佛** うゝ、ねの記 晝より用意つるおさま箱のふささどの布とかく手よ

さいるもいとうれしくて髪を引さくる布とぞさそぐをるおそろくりけりお

おとしぬれを

お ぎ **脛** 俗にいふ **和名** 十三 釋名云脛莖也言似物莖也 **波** **蜻蛉日記** 十六 おぎを布

のそい、て引めぐらさるものどもありさちがひささくぐめり **お** ぎ **高** **枕** 十三

うぶかるとて笠のいとちひささをきておぎいとたりきをのこさどのあるも屏風の

繪にいとよく似たり（盛衰）八段三ノ五尺ばかりある法師のそぎ高よか、けりるが左右の肩をぬぎてきる物を腰よまさあつめ（同）卅四三段公卿狼ごが着とりけるるそぎ染の衣のそぎたりあるをぬぎて打りけり三位これをそらに着て云々 衣短うして腰のまわりを過ぎそぎあらひなりつるそぎ 鶴脛つの部よ。はぎもぎにあけて裾をかいて（落窪）の雨の夜に少將く、りそぎにあけてきつるにたふれて土つきとり（土佐日記）不やのつまのいせーあひびをぞ心よもあらぬそぎにあけてせける（古）兼輔「いつとくとまこく也待心をそぎよあけて天のかんらをけふやこらん。是の宣長が説に人に物をかくとあらひし見する事を古語にそぎにあけていふことのはりあるべしといへり

そぎ 萩のうも葉（千）そぎの下葉（後撰）そぎのふるえ（後拾）そぎの葉（け）そぎのそ

ひえ 初そぎ（己に）秋萩 系萩 野萩 むら萩 小萩 ちら萩 眞萩（以上）萩が花（せり）萩が

花つま（是らのたぐひいづれも下）萩原（古）別「そがるかく秋の萩をら朝とちて旅のく人をいつとりまさん萩の錦（拾遺愚草）上「から衣かりい不の床の露さむみ萩のにそぎをかさねてぞきる萩見（一）万（十五）「草深みきりしそいそかく宿の萩見よ君のいつかきまさん

そぎのと 萩の戸（夫）十一俊成「ことごとりや野原よその名高うらん雲の上よも萩の戸の

萩（月清）一中「萩の戸の花のそぎあるとりの水干とせの秋のりけぞうつれる（禁秘抄）二十 又常御所也

そぎのえん 萩の宴（續後紀）十九 承和元年八月庚寅上内宴清凉殿號曰芳宜華譙云々（源 横笛）廿 かの宮の萩の宴せられける日おくり物よととらせ給へるなりけり

そぎの遊（此のそぎの宴也とぞ）後々（万）十四「ちらつゆをとらげぬべーいざ子ども露にきそひて萩のあそびせん（夫）十一仲遠「うゑおきてさかりにかれりいさことも庭よー出て萩あそびせん

そめ 生 所める（万）二卅 かるれを波由流（散木）四上「をかえ川むつきにそめるそこのうねをつとてかへてもそこのこめぞ 返し哥云々 所えて 生て。ひこがえなどいへ

補（好忠）「冬りひの手馴の駒もそちちてん岡べのをぞ、そえぬとからば

そめ 映、榮、俗よハユル 所める（夫）卅四「男山かさーの花も春かれバをその衣のそめるかりけり（後撰）二戀拾戀五「あやしくもいとふにそめる心哉（い）りてり（思）ひやむ（拾）べき。 所えて（枕）十一こききぬのいとあざやりあるつやかと月よそえてをりうみゆる（同）十紫のさーぬまも雪にそえてこさほさりたるをさて月又雪のひて色のまさりて。 映 共よ 所えー 所えだ 所え 詞の 所えかき 出す

【とめま】驛馬。又はいまど（孝徳紀）九驛馬傳馬云々凡諸國及關給鈴契並長官執無次官執云々（方）十八「さふるこがいつき」とのに鈴りけぬ波由麻くされり里もとゞろに。此鈴りけぬとの私事なれば也（同）十一驛路云々。早馬の意也とぞ

【そみ】本語のそべて【そむ】なるべし【けいさまみ】俗のケアチロ【心さまみ】老さまみ【かれさまみ】

詞の所は出す【よいさまみ】ヨシアリゲナ【みやび】ひあび【び】近くヤウスノソレトアラハ

【かれさまみ】枕三狩衣の何も袖も也打かれさまみたる【まぎれさまみ】源少女廿二き人とても打まぎれむみいりよぞやよつきさる人もおのをべりめるを源句宮

いとやつれさまみ同夕霧二けさうさまみかまめりんも同三【けいさまみ】けるよ

【と一】橋（和名）十六橋之神代紀下高橋浮橋（方）廿七「小そり田の坂田の橋のこ

がれなわけとよりのゆりむあこひそわざも【橋のもと】蜻蛉日記中七せこの橋のもと

ゆきかゝるそとよ云々【たう橋】催馬樂澤田川袖つくばかりり浅けれとされ二段浅け

れと國のとや人そ高橋ととと。契冲云高ととと常の橋を高くかくるをいふり

神代紀の高橋のそり橋のやうに聞ゆるよや袖つくばかりり浅き瀬かればかりりそめあ

る橋をささして事も事とりぬべきと思ふ心は聞ゆるよや【橋をいら】忠見「年ふれば

くちこそまされ橋をいらむりかからの名さにかならで堀川隆源「思ふ事橋柱

にぞかきつけてむり人の位まける【橋けと】盛衰五矢切但馬淨妙一來これら

三人橋桁をささりける【夫】元輔「くりもとやせこのとけとたむまでもこび

つゞくるみつぎものうを【橋のつめ】橋爪橋妻天智紀十于知波志の都梅のあそびよ

【百鍊抄】十寛元元年正月四日辛巳去夜祇園西大門前大路在家南北両面拂地焼亡西

及橋爪東至今大路山槐記二於橋妻被路馬死去云々催馬樂竹川の橋のつめ

あるや橋のつめあるや花ぞのよとれ【橋の西づめ】東のつめ盛衰二宮の兵の橋の

西づめにて云々平家の軍兵の東のつめにくつをみをあらべて【橋つくり】橋をつくる

【玉】雜二さぬき「くちぬべきいとの橋のそとづくり思ふま、にもとさつる哉拾

戀二よみ「かつらぎやとれやのくめの橋づくりあけゆくそどの物をこそおもへ

【橋もり】橋守古上「ちのやふる宇治の橋守かれをいぞ哀とい思ふ年のへぬれを永

久兼昌「よそてるややのせの渡りせる舟をいくそとびとつせこのと一守板橋石橋

【かけ橋】かゝるの部お出す【橋占】橋姫など末に

【と一】塔俗いふア（和名）十一塔登堂級也俗爲階字波兼名苑云砌音一名階訓美

【夫】十五定家空階滴雨といふ事を「くれの秋とてとるよるの雨草のいりりのう

あからざるも塔のもと(源 柳)四十 もとのもと(源 柳)のさうびけしきさりさきて御塔

(同 桐壺)廿九 もとのもと(源 柳)のさうびけしきさりさきて御塔(同 桐壺)廿九

總角卅三 ものをのりもあへせ云々

も一蓄 (和名)十八紫ノ 紫喙也久知。とある(伊勢物)九 白き鳥のも一と足とありき

も一箸 (枕)十一 心よくき物、物参る所とよやも一かひあとのとりませりありさる

も一 一つがひ(うつはあて宮三) 白がねのも一一つがひ(雲圖抄)居御箸二双箸下る

(うつはあて)七 祭の使冊 お前をといつくを参りかひらせとトまり箸くさりとあるトのれと

題出しとうびて(同 吹上)二十 かくて御かひらせとトまりも一下りぬ猶多 箸ふれ

(同) おとまされに物一給へば箸ふれも一給へぬ御臺を七八とたて、も一を

まのを(宇治拾)七 水飯を引よせて二とびさり箸をまの給ふとみるをどおれ物

みかうせぬ(和名)六十四 筋波 字亦作箸源 柳

補 も一疊ノ 縁(堤中納言物語) 錦も一かうらいも一うけん紫も一の疊云々 (榮もとの車)

も一の車 も一きのも一さりとるかた、みどもをあひひぐささかさとまひりて

しうせ給へりはしに 意同大方。ドチラツカズよ(古) 雜下 木もあらざ草もあらぬ竹のよ

も一はしに 意同大方。ドチラツカズよ(古) 雜下 木もあらざ草もあらぬ竹のよ

のも一はごが身のかりぬべらかり源 柳

も一端 (俗と同) 是の (源 若紫) 十 ちかさのあらはとや侍らんけふもも一

おひーま一ける哉(枕)五十一 参りさればとトめおひける人どもの物のえぬべきと

しは八人ばかり出るまけりも一の(蜻蛉日記) 中下 も一のまきあけて見出して

も一の方(源 手習)五十 も一の方一立出てこれ(枕)六、も一の方より御らんト出

ても一のま端の間 端の意也(大和物) 六、五間をりかるひのさやの 云々 あゆみいりてこれ

も一の間一梅いとをりうさささり 云々 も一ちか 末ノ末 なる意

也是ら別。も一つら 方にいふべし (源 帚木) 卅六 も一の方のおま一ばかりかるや

うよておすとのでもれ(蜻蛉日記) 下五 文のも一つらとあ

も一端 (屏風花) びら(和布) あどを出しつおいてるべし はしを (枕) 十八、めを一すばかり紙

を布のも一、て引めぐら一さるものども 云々 はしを (枕) 十八、めを一すばかり紙

よつ、みてやりつ 云々 をるるめのも一をつ、みて給へり一が (同) 三

梨の花 云々 花びらのも一よをりき句ひこそ心もとなくつきさめれ(同) 四ノ紙の

も一に哥 云々 補 (万) 十四、七 「あづさ弓すゑのよりねむまさりこそひとめをおふみ

かをも一におけれ(源 梅うえ) 二 志きもの一とねかどのも一どもに(千) 戀四 一あ

ひみんといひわさりい行末の物思ふことのそいよぞありける **はしの方** (源空 蟬) **三** 此きいにさてさる屏風もそいのかさおいさ、まれさるに 云々。くさぐさの **そい** をもいへり

そい 端。文にい **(源末摘)** 卅 此文をひろげあがらそいに手あらひをさひ給ふを 此次

い別又出 **そい** たがき 也 **(同竹川)** 十 み給へとおぞうかまがちにかきてそいよ哥

云々 **(同浮舟)** 六 あけ給へれそいと若やりある手にて 文詞云々とてそいに 云々とか

きさり **(枕)** 十九 里に出てそいあるよとく参れおとせせとのそいに 云々 かと

仰せられさる御うへりごと 云々

そい 端。本よもあれ末よもあれ小 **物語のそい** (蜻蛉日記) 初世の中は大方ふる物語

のそいかどをみれば **經のそい** (枕) 十六 經のそい打よみ俱舎のおゆといひつゞけあ

りくこそ 云々 **そい** 狭 廿八 かととバありを其あるいとみゆるそいぐの

そいよおちちらぬ

そい 端。是も意同きりて打よつる **木のそい** (枕) 一六 法師の事さるいいとたのもい

きささをさ **木** のそいかどのやうよ思ひたらんこそいといとそいけれ

そい 端。共に橋と **(源竹川)** 十一 九け川のそい打出一ふいにふりき心のそい

いりきや **(千)** 戀一仁 昭法師 「世をいとふそいと思ひい通路はあやかく人を戀ささる哉

小グチ、物ノハ **そい** 端。是も意同きりて打よつる **木のそい** (枕) 一六 法師の事さるいいとたのもい

そい 端。是も意同きりて打よつる **木のそい** (枕) 一六 法師の事さるいいとたのもい

のるそいの立枝のうそ紅葉たれどが家の物とみるらん **(新六)** 六 家 「木がらいの

末野またてるそいもみち秋のかさみよよぎてふらん (夫木) 十五 此題の哥別よ

そい **弓** (古事記) 上四 取持天之波士弓 (古事記傳) 卅三 (宣長云) 埴の色いさる

木ある故にいふと或人いへり此木の俗よ波是といひ山漆ともいひて實をバ蠟燭よ

造る葉よく紅葉する物よて哥よよめり **(万)** 廿 かののみよより波自由美とた

よきりもそい

そい 端。アレコレノ事イサ **(源)** 維う本 廿 ゆく方もかくいおせう覺え侍りま

お下さるらん **そい** ハシタ (金葉) 戀下 「かほからぬ身をうぢ河のそいといそれか

らもこひわさるりか

そい 殿 **(落窪)** 二 清水詣 中將殿の御車ともいそいどのに引さて、むをに

さち給へるに 云々 よき日にてそいどのよひまもかければかくれの方よおりんと思

ひてまきてゆく(夫) 廿一 爲家「そーとの、棋の板をいーまーにつまきてのぞる山ぞ
かーこき(大和物) 三とーこが志賀まうでたりけるま増喜まといふ法師 云々
ーどのお局をしてゐて(注)お叡山の下大宮権現跡をされ給へる所也又そーつ方お
る所をいふまもや侍らんへり又(真淵)の山谷々けて橋のぞとく作れる家をいふべ
ー廊をささとのといふま似たり といへり

そーまーら 匾の所又附す

そととみ 半節。常のまとのまのあり(源 タウヤ) 初かまのそととま四五間をくりあけ
ハばかりある也

わさしてまざれおともいと白うまをいけあるま(同) 七そととまのおろしてけりひ
まんとよりまゆる火の光りやさるよりけにはのりまあはれあり

そーぢり 端近。体の詞也 今と同 そとぢりある(同 さうま) 十人めもいけき頃をれば常よ
りもそーぢりあるをそらおそろうおぞゆ(同 うそくも) 六例のことにはそーぢりお
る出居おともせぬを

そーちりう 同、用(源 朝うや) 十そーちりうおがめがち(同 推う本) 廿心より外
の語

にそらの光り見侍らんもつ、まううてそーちりうもえまどろき侍らぬ(枕) 八雪
のいとたらくふりつとさる夕ぐれよりそーちりうおおと心ある人二三人ばかり火

桶中まをゑて物がさりとするそとに補(榮ゆふて)ともすればそーちりう打お

がめて そーちりき(源 タウヤ) 十そーちりきおまー所ありければやり戸を引あけ給

ひて(夫) 十三 頼政「妹こふとまそそーちりきうさ、ねの枕のそまにやどる月哉

そーりさら 走孺 (延喜 齋宮式) 二 齋王駕車赴向走孺十二人車副二十四人

そーりかき 走書。かおの更也まおをも心のゆくま、に文字引つ、けあどして手バ
ヤお筆をそーららひむるをいふ(そ、ま、き、四)のハ体の詞のやうは聞
ゆれど猶(源 帚木) 四たううのべまりの情まてそーりがき折ふのいらへ心えて

打おとばかりり(同) 六こ、かーこの點がにそーりがきそこわくとおくけしき

まめるハ(同) 廿うちよまそーりかきかいひくつまおと手つき口つきまおさど

ーからまそーりかきて(同) 廿一まんおをそーりかきて(落窪) 一とまてあんとそーり

かきてやりこれバ(源 若菜) 八百まやりりにそーりかきて(そーりかきけり) うつ不 初秋

上いそめる嵯峨の御時の女御ぞうりそれまおとらぬ手おとそーりかきけり(そーり

かきさる(同) 廿そーりかきさる文のおいらくに人みるともかまもあらは(同)

五 廿こともおくそーりかいさる手の(そーりかき給ふ) うつ不 藏開 下そーりかき給

ふさまおとこともおー(源 梅うえ) 三十こともおき手本 云々心にいれまそーりかい給

へりーくたりばかり 云々さまことと覺えーまや。 かいハかき
の音便也

走競 (枕) 五、今の世よのそりくらべをかんする

走湯 (永久) 出湯「まーら、の濱のそりゆ浦さびて今もめきのかけも
うつらせ

走火 (枕) 十、さごがき物、そりび (古) 小町「人よあんなつきのあきよ
の思ひおきてむねそりびに心やけをり。(真淵云) 火の外へおねとおをいふ也

走。人獸畜魚車舟又水水よて石のそりる (枕) 五、供にさふらひ、雜色物
又血のそりるあど今と同方よいへり (枕) 廿一、供にさふらひ、雜色物

そりて (同) 廿二、そりる車の (云々) (堀川) 霧信「石そりる音のかくれ夕
霧の衣の瀧を立ろくせども (夫) 廿六「石そりる音の氷よとちられて松風おつる布

引の瀧 (蜻蛉日記) 十八、むねつととそりるに。 (むねと、俗のワクノ、スル
をい) (補) (宇治拾) 七、水そりてかきければ (著聞) 十一、所く人つらひそりか

して (枕) 廿七、そりてひとりわきこれよおろくかといふこそをり、けれひのり
のちりくひくも (著聞) 十六、そりてちてとめけるものども (同) 廿二、とそりて

むらひるより (是、今云さ
ひらひかり) (源 紅葉の賀) 廿、うふりかど打めがめてそらんうろで思ふよいとを
こかるべいと云 (そりらる 所、走) (枕) 廿二、とそりてと思ひつるよ人目も

あらむそりられつるを (そりらる、
ともいふべ、おのづ) (そりらる、
不也、あど
もいふべ)

。そりらる (蜻蛉日記) 廿一、いりよ土にやそりらると思ひつる人も車にのせ
そりらす (ともいふ) (源 帯木) 卅、人そりらせやる (伊勢物) 八、瀧おと水

そりらせかどして (そりらせとる) (大和物) 六、小舎人
らへせそりらせて (枕) 六、心ゆく物物見のへさに (云々) 牛よくやるもの、車そりら

せさる (宇治拾) 卅三、馬をもそりらせけれども。 (そりらる) (むる) (つれ) (二
段) 八、この馬をそりらるむるを見て

。そりれ (夫) 廿一、堀川院御「追風よいとてはそりれつく、舟をきかとの關せきと
どむとも

。そりり (そりりつる) (枕) 廿二、一條の大路そりりつるをどかざるよぞ皆わらひぬる
そりりて (宇治拾) 卅三、足の皮をとりくもへて沓のきびきを刀よてきりさるやう

に引きりてけり (云々) 足を見ければ血そりりてとまるべくもか、はり入 (竹取)
竹とりの翁そりりいりていとく (源 帯木) 卅、云々、といひもそりてそりり

出侍りぬるに (同) (横笛) 六三、の宮まつばかりにて (云々) 出給ひてそりり來 (同
若紫) 八、そりりさる女子あまこえつる子どもに似るべうもあらは (そりり向ふ)

(今物語)十やがてそりむらひて尋ねるにそりかゝる(伊勢物)八十その石の上
 にそりかゝる水の小かうト栗の大きさにてこぞれおつ(宇治拾)廿二そりかゝり
 てきぬをむぐんと思ふ云々(同)廿三刀をぬきてそりかゝりりさる時(枕)十二ま
 ことかとして忘れものさしていふそりかゝりりさる(枕)十三よろづ
 の犬ともそりささぎそり逢ふ(宇治拾)十二おそろけあるものそりあひ
 て(同)十三人ともそりあひてとらへつそりありく(枕)六祭の頃云々いつ
 しろその日はあらんといそぎそりありくもをり(同)八鼠のそりありくいと
 よくそりまどふ(蜻蛉日記)中上天の志さめりて西の宮へ人そりまどふ
そりりよる(枕)八そりき人二十余人をりそかさにぬきてそりりより云々
そりりうつ(同)杖の所そりりうつてよぐれば云々そりりちる(宇治拾)十六物お
 そろりりければやがてむきさるりささまに皆そりりちるそりりめぐる(夫)九雨
 の足とまりもあへ此里にそりり過ぬる夕立の雲そりりめぐるそりりまぐる(宇
 治拾)五庭火をとめぐりばかりそりりめぐるらんと思ふいりあるべき云々六庭火
 を十まはりばかりそりりまわりるにそりりめぐる(源)玉葛十もや舟といひて云
 思ふ方の風さへを、とてあやふき迄そりりめぐるのそりりめぐる(宇治拾)十九川よざおりと

入るそりとに云々廿くがへそりのそりるをそりりめぐるそりりめぐるそりりめぐる
そりりめぐる(宇治拾)廿二門のもとにそりりよりておやうをねちて引ぬきてあく
 ま、にそりりのそりりついでそりりるそりりとにぞ此そりりはそりりあひさるそりり
 て三町ばかりそりりのそりりびて例のやうにのどりにあゆとて云々此余おいてそりり
そりりの約也にけそりの部も出す
そりりの端が端まで末(源)紅梅九けに人よめでられんとかり給へる御ありさま
 かれどもそりりにも覺え給ひぬ猶さぐひあらんと思ひ聞え源みくらぶれ
 思ひあらぬと也
そりり階(孟津)階孟津やねのある也御そりりをよせん源末摘廿そりり
 くそりりのものと紅さいいとくさく花よて色づきけり(江談抄)二荷前行幸之日天
 皇五條皇后漸有所爲御輿有新儀造階階也(狹)廿七そりりの南おもての
そりりのまひと間ばかりをあけて人いあるるべし
そりりがき端書文の俗にいふ猶やがきカヘス(源)浮舟四十四文そりりがきに哥云々
(同)若菜下七猶さ此そりりがきのいとそりりに侍るぞやとてひろけされ(うつ
は國讓上六云々とてそりりがきに云々と聞え給へり(散木)廿三云々くれければ

かれよりおくり侍りける 哥云々 せうがきに里をわかれせとかけり

附 せうつくり 端作

せうかこ (和名) 十六 生薑 久禮乃波 乾薑 保之波 (神武紀) 十四 破餌介瀧補 (輔親集) 中納言殿 せうくりこのめよもつきたる心をかかどくくしてこれをおこはかりへいせよとありくバ「からくしてめよつくされバ今よりの此せうくりををあざにおもせト

せうに 意也。俗に物の数などの不足あるをいふも轉トする也。 (竹取)

せうなる (源 末摘) 廿娘 せうなるこよやせうなる大きな女の 云々。娘よをさ思へばおとあめいなる意也。 (後撰) 四 (伊勢集) 廿一身のうきをいれバせうなるはありぬべし思へばぬのこがれのとする (いせ) 昇進もせず沈もせずス (大和物) 六けふ日せうなるはありぬ奈良坂のあかこよ人の宿り給ふべき家もさふらぬて、にとまり給へといひて 限のオソシハヤシあるをいふ。 (更級日記) 日山のとよか、りにせり今宿とれとて人々あがれて宿もとむる所せうなるよていとあやけある下その小家をんあるといふに 是も宿のアヒダの意也いづれもドチラツカヌ意也

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

せうさる (和名) 十八 鷓鴣 波之太賀 似鷹而小者也 云々 (蜻蛉日記) 上 廿一身のせうさるのせうろよて (後拾) 秋上 公資 「とやうへりせうさる手からい、せう鷹のくると聞ゆる鈴虫の聲 (新續古) 冬 忠房 親王 せう鷹のをぶさの鈴をから柴のかれのまさらでとつきを哉

六打をぎなますしけれどあまりそしとなくやと思ひかへして(同 末摘)卅ついでちの御よそひとてとざと侍るめるをそしとさういへり侍らせ云々同意にてそい
 の心ざしをムゲニセマ意也 **そしとかりり** (同 榎柱) 六打とえておとづれもせはそしとかりり是も同
 りしに意也 **そしとかく** (同 帚木) 卅鬼神もあらさつまとき御けのひをればそしとかくこ、に人ともえの、しらせ(同 蟹) 三たからせけしきばと聞え給ふでとにむねつおれつ、けざやりにそしとなく聞ゆべきまのあらねばと見しらぬさまにもてなし聞え給ふこれら共は男君のいひより給ふを物の情もしらぬや **そしとあき心ち**
中、廿五、女君寺で **蜻蛉日記** もりし給ひし所は 出んと思ひおきしうと京のをかかちことはいひあしとるまのいとそしとあきこ、ちをべしと思ひてさしをかれとるやにをりぬツキガアルマ **そしとかく** (源 榎柱) 廿六宮も御けしき給はらせ給へど風おこりてためらひつるやとにてとあれはそしとかくて出給ひぬ(うつは 國讓)
 上、五世中にさびしかりしか内はさふらひころとて南の宮に御迎へよとて参りて侍りしうとそしとなくの給ひしにえまらざりしにツキガナクテ、トリツキ **そしとかりりける** (源 帚木) 五いづ方につけても人さろくそしとかりりける御物語りかとして打笑ひおのさうを **そしとかくて** (大和物) 四、若うの段 さがさまのいらかくなりよるを思ひ

そりるにいとそしとなくて昔も打せて、よけしけりこれらカツカウ (源 榎) 七あけゆくそらもそしとなくて出給ふ **そしとあき程** (蜻蛉日記) 上下 何りまといとくらりらんをそしとてあるやとあううをれば 云々 見出しさればいとそしとあき不どにかりぬをといそけは これらアタリミラレ **そしとあけ** (源 夕や) 六とかりの事いえ聞侍らせとそしとあけは聞ゆれば コベナクホデハナコ **そしとかくて** (蜻蛉日記) 上三四日ばかりありてとづからいとつれなくとえさり何りきとるとて 見いれねばいとそしとなくてかへる事さびしにかりぬ ツキガナクテ **そしとあき事** (源 桐壺) 初 **いとそしとあき事** おなりれど コマルヤウニ人ニチタマレ物 **そしとかくて** (同 若菜) 六下 盃のめぐりくるも 云々 もとせをがらさびしし給へばそしとなくともてとづらふさま 云々 源は酒をいひられてい **そしとかく** (同 松風) 十そしとひくは松風そしとなくひさきあひさりの アタリカマハズメツタニ **そしとあう** (同 竹川) 卅月ハ夜ふりうあるま、にひるよりもそしとあうをこの布りて アタリノミラル、バカリ **そしとあき心** (うつは 帚) いとそしとあき心をあしてあそらの中よまどりぬ
 前後ナカヘリミ意也 **そしとあきめ** ウレシキメ、カナシキ (同 國讓) 中五時々そしとあきめをあん見給へり ツキノナキもいふべし **補** (元真集) 「さがやとよるゑてさよと

ん女郎花人そいさる秋の野より(源 繪合)いとそいさる花さきりかかくとあら
 へさるべきくまよもあらぬをとて(和泉式物)「かつらきの神もさこそいおもひけ
 めくめぢよわなれそいさきまで(同)「おこかひのなるもあらばかつらきのそ
 いさかしてさてや、とかん(源 東屋)十人のおやをらんこともそいさかかりて
(同)四十とゞいとどくそいさかく見いらぬめを見つるよそへても(同)六十花やか
 よさし出さる朝日かけよあまぎみいとそいさかくおやゆるよつけて(同 橋姫)廿七
 霧それゆけばそいさかりるべきやつれをおもなく御らんトとがめられぬべき(同
 楨柱)四十「よるべかえ風のささぐは舟人もおももぬりよ磯つさひせぎとてそい
 さかりめりとや(同 初音)三おとゞの君さしのを死給へればふところ手引おやいつ、
 いとそいさきささりかとさびあへり(同 篝火)二ふりき心をもさづねをめていで、
 心よもかかえねバかくそいさきなるへ(近江君内府の心)「和泉式部」天河まよ
 ささりくあかさ、ぎのそいさかくてかへりもぞする(金葉)詞書をとこよ、ろか
 そりてつ終よそいさかければ(枕)十四ねおびれておきいせりけいさいらへの
 そいさかさかとかさりてさらひ給ふ(同)廿五かれがそいさかくて雪の山までか、り
 つさひけんこそいとらかへけれ(源 野分)三もとあらのこ萩そいさかくまちえさる

風のけいきかり(山家)「秋風のふけ行野べの虫のねのそいさきまでぬる、袖り
 か(うつは 嵯峨の院)卅三うちよこれくれ御らんぞるこそそいさかけれ(宇治拾)廿二侍
 どもそいさかくいひければあきつ、かへりて(同)十三此たそふれいとそいさかりり
 けるよや(著聞)十二布施そいさなく多くとりてのぞるとて(宇治拾)雨風そいさあ
 くてかへるよおよそで(源 少女)五十ことなふれてそいさかめ
 そいたかめ 此めいませの約めてそいさかませ也。そいさかくあらむるよてそいさかく
 又意同ニマラナルをもキビシクナルをもムゲニ情ナクナルをもいへり
(源 桐壺)五こかさかか心をおかせてそいさなめさづらひせ給ふ時もおやくり
 そいたなめて(同 常夏)四 中將をいさくそいさなめてさびさせ給ふつらさをおや
 ーあまりて(同 胡蝶)十ささくもあろしめ御らんトさる三つ四つひきかへー
 そいさかめ聞えんもいりつとて御文ばかりとりいれかどー待めれど(同 行幸終)廿
 笑ひぐさにつくり給へど世人のそちがてらそいたかめ給ふかどさまトーいひけり
 そいたなめらる(同 手習)卅念佛より外のあたささせそとそいさかめられり云々
 そいさもの 問者の意あるべし。俗のハシタ又ハシタ女といへるに同されど今より
 又中間男あどいへる名目もミえて此とそいさものもそれ同く身のやどの高(枕)廿三
 二さうくてよろしきこのけそ女の名をいひかれてよびさるこそよくけれ 云々

そしこのものさらのへべかどのされとよし(狭)十一上軒のあやめを一筋引おとしていそぎかきてそしこのもの、せりけあるしておひて奉る(榮根合)七冊そしこのもの女房の局の人などをりくちとて、くつせりありく(金)下物へまうりける道よそしこのもの、あひとりけるを(云々)補(著聞)十六、四、布り川の院の御時中宮の御方の御そしこのものよ

そしこのもの、(落窪)一、石山詣し給ふも落くばの君のつくりひそしこのもの、人あこぎさなりありとて供せぬ所よ

そらへのあるにさうぞきりへさせかして云々の、しりて出給ひぬれば

そしつくり 端作 所よ 橋の所よ出せ

そしつくり (和名)十 説文云柱、楹也 波之 功程式云東柱之良 豆賀波 (源 薄雲) 冊 所よ

りる給へる夕をえいとめでそし(枕)三、六、ひさしの柱よりうろとあて、こかさまに

ひきておひまは(補)金 連歌 「見わとせば内も戸をばとて、けりおくあるを

もやそしらといふ宮柱 まき柱 うつが柱 竹の柱 あさきの柱 杉の柱 ちど多

上のかあ 柱のもと(枕)六、柱のもとよりぞ見奉る(蜻蛉日記)上十 帳の柱にゆひつ

けとりし小弓の矢とりてとあれば(云々)柱ぐくれ(源 野分)十 六、そしら隠れよそし

ばと給へりつるを。 猶(の)部よ。 柱とて 今と(續古) 神祇 文永二年八月十五夜内宮

の御そしらたてにあとりて侍りければ

そしら 柱。是の物をさし(古事記)上 此三柱、神者並獨神成座(持統紀)八 金銅阿彌陀

像 云々 各一軀(三代實錄)八十一 國家 乃 無動 岐 事 波 太政大臣一柱 爾 依 利 天 奈 (うつは

藤原の君)冊 六、を御りよむことりし給へれと今ひとそしらにまはま(神代紀)上

以(磯)盧島爲國中(之)柱

そしむ 草創の創の字の意はて物事を(源 夕や)六 修法かど又くそしむべき事かど

おきての給へせて(そしむ) 中、三、かがきしやうとをあんそしむ

るもろともよせよとありとてそしめつ 云々

よそしむる(枕)六、そるりある物、大般若御ときやうひとりてよそしむる日

。此余いひそしむ いひそしめて(あどそべてあ

。そしめ(そしめて) 万 三、藤井ヶ原は大御門始給ひておろしそしめて(伊勢集)七

云々 舟をつくりておろしそしめてあそびけるに(そしめける) 宇治拾 四、東北院の

さつ講そしめけるひとり 云々 たのそしめ(源 明石)廿 一、そよしの神をたのそし

しめ奉りて(そしめ) 又(そしむらん) ちどくさのてはを(けしき) ばとそしめ(同

幻) 三、梅の花のそづりよけしきばとそしめて

いられ給ひられ一條辰橋といふのむろ安部晴明天文の淵源をきかめて十二神將をつりひよるが其妻職神のりにおそれられの十二神を橋の下に咒いおきて用事の時の召つりひり是よて吉凶の橋占とさづねとへば必職神人の口にうつりて善惡をいめと申す云々
うらとふそい 古間橋(夫)廿一家長「思ひりねうらとふ橋よまさいりれ世の人をたのこさらん(同)同後九條「かぐさめてうらとふ橋よまさいりれつれかき中をまちもこさらん

そいのつめ 橋の所よ せいのま 端の間 せいの所よ出せ

そとく 彈(文選) 九漁父辞 新沐者必彈冠(つれい) 百七十 碁磬のそとに石をこて、

そとくくにむりひある石を守りてそとくにあさらす 補(著聞)老るものぞとどきた

はとのそとくる(神代紀)上四至淡島而縁粟莖者則彈渡而至常世郷(つまそとさ

のそとさ 同意也

そいやう 八省(源)十そいやうよこてつりけさる出車どもの(花鳥大極殿を八省院といふ)八省ともいへり

そとまる 初まる せとまりける(古)序 此哥あめつちのひらけせとまりける時より

いせきにりり せとまれる せとまらん あどもい せとまりて(蜻蛉日記)二下中 六日の

つとめてより雨せとまりて三四日ふる川とまさりて人流るといふ(同)同 二月十五

日に院の小弓せとまりて(順)天祿といふ年せとまりて三とせの秋のかりをさる月のまもの十日に今二日おきての事あり

せいけ九 橋の所よ出せ

せいふね 遊艇(和名)一唐韻云艇小船也釋名云二二人所乘也漢語抄云艇平夫遊艇

波之(枕)三 せい舟とつけていそとうちひさきよのりてこぎありく(抄)大舟よつき

をい(宇治拾)十四 淀よて舟よのりなるそとよ 云々十 せい舟よてあきかひするもの

どもよりきてその物やかふかの物やうふかどさづねとひける中に(蟹)のせいふね

(堀川)頼「むやひをるうまのそあまのさえばこそあまのせい舟ゆきも忘れめ(玉)

戀一 清少納言「たよりある風もやふくと松しまよせて久しきあまのせい舟補(玉)釋

高辨「めいひさる龜のうき木よあふかれやさましくえたる法のせい舟

補 せいき (万)三、五、七、むろいこそよそよも見りりさきも子がおくつきともへい波之

吉さや山(同)五、十、波之吉くも皇子之命の 云々(同)十七、せいきよいかせのまこと(同)

三、せいきよいつまのまこと(同)廿、せいきよい妹とあひま(同)卅、せいけやいあ

かおくつま(同)四十、せいきよいさせのまこと(同)四十、せいけやい君がさ、あぞ

此意の冠辞考よくと

冬トめ 初始 (竹取)おもてをふさぎてさふらへと冬トめよく御覽トつれき(枕)五十一

参りされば冬トめおりける人どもの 云々 (補)万代(宗保)家隆「年ふれと戀ハをいりもあ

りけり思ひそめいハ冬トめあれども(同)俊成「冬トめあき昔とおもふぞあされある

いつよりこひよむそ不、れけむ(冬トめ)ハ(大和物)六冬トめハ何人のまうでさるか

らんと聞るさるに(源)すま(九)皆ささり参りし冬トめハ 云々 冬トめより(源)桐つや

初冬トめよりされハと思ひあがり給へる御りさト 云々 (枕)十五、人のせうをこお

不せでとあどのれゆるをついでのま、にさおめよりれくまでいといひよく

冬トめつりた(源)そま(九)冬トめつ方ハとふらひ聞え給ふあとありき(冬トめをいり

始終)古(序)うち山の僧きせんハ詞りそりよして冬トめをいりたしから(源)稚

本(五)冬トめをいりたがふやうある事あと見せ給ふまトきしよきよかん(冬トめも

冬トめ(大和物)一「あらまこそ冬トめも冬トめも不えめけふよあハできえに

一物ト(源)句宮)七「れぞつうあたれよとハまいりよして冬トめも冬トめも若らぬ

どが身ぞ冬トめ(春の冬トめ)(竹取)春の冬トめより(拾)雜賀御屏風「きのふより

をちをばしらる百とせの春の冬トめハけふよぞありける(新千)雜上院「もろ人よた

ま物そらし立春の冬トめのけふのとよのありりハ(秋の冬トめ)(蜻蛉日記)上(秋)の

冬トめのころそハ(冬)の冬トめ(新六)冬(信實)「けふしこそ時雨もことにふりまさ

れ思ひしことぞ冬の冬トめハ(年)の冬トめ(と)の部よ出ず(万代)の冬トめ(續千)賀平

「あきらけき光りぞしるき万代の冬トめとあふぐ秋の夜の月(寅)の冬トめ(十二)時よ

いふ(著聞)五(戌)の終りより寅の冬トめにいたる迄(云々)宮づりへの冬トめ(うつつ

藤原の君)とやづりへの冬トめハ侍るよ(云々)物(の冬トめ)(貫之)下(廿八)と冬トめとひと

ハせりさてもあるべきを物の冬トめにりへるべしやハ(此)余かして(冬トめ)の春(千)

賀(左)大臣「千代ふべき冬トめの春としりか不しけしきことなる花さくら哉(是)ハ千代ふ

春をいふ。孟春の(冬トめ)の夏(首)夏(躬恒)題(上)廿七、歌の(冬トめ)の秋(同)冬トめ(冬

正月をいふ。孟春の(冬トめ)の夏(首)夏(躬恒)題(上)廿七、歌の(冬トめ)の秋(同)冬トめ(冬

(同)同(廿一)是(順)五(冬トめ)の冬(の)のえ申の夜(云々)(文選)西京賦(孟冬)云々

冬トめの年(著聞)二(敏達)天皇位よつき給ふ始の年正月朔日生れ給ふ(聖德太子)の事也(冬ト

めの日(源)神(四十八)講の(冬トめ)の日(先帝)の御料つきの日(云々)又の日(云々)

冬トめの日(云々)万(万)冬トめ(亥)の日(順)天元元年十月冬トめ(亥)の日(右)大臣の

女御の火桶よくたものもりて内裏の女房よつりハ(云々)契冲云初亥ハ物ハ(冬ト

めの男(大和物)三(備前)守さねあきらまざり男ありける時よなん冬トめの男よ

さりける冬トめの北方(源)若(若)菜)七(下)かの冬トめの北方をももて冬トめをなれさて、(冬ト

めの事(源 帚木)六其まどめの事どもまきくくとも申侍らんまどめにてハシメ
の意(蜻蛉日記)上歌云々これをまどめにて又々もれこれとかへりごともせざり
也(蜻蛉日記)三歌云々これにれどかへりごともせざり
けれまどめ同下中云々といふをまどめよて思ひまどめけるよりの事いとれなりり。

まどめてまどめけるなど又常いまどめてハシメト。三様まどむの所ハ
出ず
まどま端ある島の(盛衰)九六段康より云々 舟なりけりまどま島のものどもが硫
意あるべし
黄とりまどゆるりと思ふよどま近くこぎよせ云々

まどもり橋の所ハ附れ

まどひめ橋姫(古)戀四さむいろま衣りまきこよひもやこれをまつらん宇治のま
まどひめ(實方)宇治おて「まどひめのかまど袖もりまどひで思ひざりける物をこそ思
へ(源 橋姫)廿「まど姫の心をくまてまどせさす竿の雫ま袖ぞぬれぬる(土御門院御
集)「まどひめの袂やいろま出ぬらんこのまどをぐる、宇治のあどろ木(袖中抄)八

(古)上雑「まどやふるうちまどひめかれをしどりなると思ふ年のへぬれを顯昭云
うちまどひめと姫大明神とて宇治の橋下まおのる神を申はま其神のもと
へ離宮と申神の毎夜まかまひ給ふとて其かへり給ふ時あるとて曉まどま宇治川
の波のねびまどくまど音のまるとぞ申つまへる。まどしるま云々の哥契沖説ハ
女を橋姫まよそへてかくまよ

めるあるべしといへり(まどひめ)
の巻のま姫君をよそへる也

まど推古紀八三月丁未朔戊申有蝕盡之。本語未勘

まど灰(和名)十二灰比同十四染色具拾灰云々今按俗所謂椿灰等是也(枕)一ひる
になりてぬるくゆるびもてゆけまどびつ火桶の火も白まどひがちになりぬるハ
ろ補源榎柱五さるこまあるまどひのめまも入て(隆信)四位従上して侍り

いによりまどひの卿のもとより「紫の衣の色をまぬまどひのさしもうれいとまらまや
あるらんうへし「うれしきの色もまどひをなまどひをふものハ君がことの
まどひの下拾玉三「つとまどまきえせざるらん埋火もまどひの下まどまえせざり
けりまどひやく(盛衰)三四おの白山權現の御前まど一味の起請をかき灰ま
やきて神水まうりべてこれをのむ(夫)廿九家集寄椿戀仲正「花まさくま山つむきをとりま
へてたが色このむ灰まやくまどまどひさす(万)十二「紫ハ灰指物ぞつま市のやその
ちまたにあへる子やまど(堀川)人不知戀仲實「いとねども思ひをめてまどまき木のま
ひまど色ま出まどまど(後拾)春下齋宮女御「紫ま八しをそめま藤の花いけまどひ
まどまものまどありけるまどかへる(枕)八昔おまえてまよある物えびぞめのお
り物のまどひりへりまど(抄)蒲萄染薄紫也紫ハ椿の灰をさす物をれハ其色のまどま

を灰りへるといふ也（源 末摘）廿紫の紙の年へにければそひおくれふる

めいたるに是も色のカうつゝのそひ（堀川）紅葉「白露のうつゝのそひや染つらん

やそつ草の岡のもちぢまよけるつゆ草を紙に染おきて物よそひよある灰に成。是ハ火葬

（源 桐壺九）そひよかり給はんを見奉りて今ハあき人とひよふるは思ひかりあんとさ

うゝの給ひつれど（散木）六下田上は侍りける頃椿をきりおきて灰よやうんとてか

らそを見てよめる「さか身とも椿の枝のみゆる哉そひよあるべきそどのちりさに

そひとある同意也（拾）戀「もえさて、そひとかりかん時よこそ人を思ひのやま

んでよせめ

そひ奪本語ハうはふ也（古事記上十四欲奪）我國耳五十九そひ給ハせ（源 夕霧）十

九ありやうふもそひ給ハせ也文をそひとある奪得（うつそ 藤原の君）廿むく

ち京さらへば數しらば集りて一の車をそひとある云々車のそされをか、けての給ふ

そひえつこれや此をよ給ふ御娘云々（蜻蛉日記）九上云々かくうつる也けいきを見

てそひととりて云々（宇治拾）三卅其人のひをまゝのかそでもていけんそひととりて

れに見せよ云々よけけるをおひてそひととりて主にとらせつそひあらがふ（宇治拾）

六ノ羅刹をひあらがひて俗と争ひてハヒアア也

そひ此詞をそへていへる次々の詞ども俗と同一見虫うつらあどのハフをいへり。

そひそれガ中ハ實にハフにあらねどさきに出せるハフハ、又同病む人老人そ

べてハヒモスベキホドニ苦いきを堪忍ふ折又敬屈する折あどもそひよるそひあ

りくあどもいへり又た、かるく添へていへるありそれハ俗のツイテヨコト又

ツイテヨコトあどの意よてた、家よ入るをハヒイルといへるもハヒテ入ルゴト

ことト、イウラぬ意也といひさるハツイテヨコトハヒテモ往來をべき意より程遠

うらぬをいひてひかくるハツイコソトハヒテ隠れざるやうに人目よふ、ぬ意

也今見及ぶま、にかたつ方のミ出トふるもあり大方いづれも二様よいふべくや猶

味ひて出るべし、をいへるハヒあり

そひいり（盛衰）七五にひの、池の水の中にそひ入りて草に顔をかく

いて、（うつそ 吹上）十下まつらさまづ吹上の宮よそひいりて君のお前よつゝいなる（同）

十あるトの君内にそひいり給ひて（源 瑩）五ことつけてもそひいり給ひぬべき御心

をへかれバとさまらうさまよそびいられバをべり出で（蜻蛉日記）十中下あるトもお

どろきささぐにふとそひいりてそひいる（同）十中下そひいるま、に 云々

そひいづそひ出いで、そひいでより（源 東や）廿若君のそひ出で 云々 志まゝかぐ

さめあをば下で（同 夕霧）四十かれさる草の下よりぞんさうのせれひとりのを心か

がうそひ出で露けく、とゆるそど 云々（宇治拾）十三、三尺ばかりある鯨のふと、と

して庭にそひ出さり、そひいでの小田家より遠うらぬツイ（夫）七仲正「かまどもる

とつものおとさいりよりそひいでの小田の早苗とる見よ

そびろ 葉廣 (重之) 四 「いかに野はむら／＼とえり柏木の葉ひろよされる夏の來し

けり(夫) 九 後鳥羽院 「夏ふり庭も葉ひろの玉う／＼とえぐれをあらまよそのむら雨

そひろがし 冬 (新古) 能因 「ねやのうへは片枝さおおひ外面をるそひろ柏に霰ふ

るかり(新六) 光 俊 「けふこそそのそひろかまはしゆふりけてこの森はます神まつるを

れ 大方の柏木のといへる葉ひ 大方の柏木のといへる葉ひ れろうちどの異木おもいへり

そひり 俗にいふ這入口也ハヒ (後撰) 春上 「いもが家のそひりよさてる青柳に今

やかくらん鶯の聲(夫) 三和泉 式部集 「見よとくる人さよもあしど宿のそひりの柳下を

らへども(堀川) 顯 仲 「柴の屋のそひりの庭におく蚊火のけふりうるさき夏の夕暮

そひごさる ツルノハヒテ引ツバク意也次の (神代紀) 上冊 松柏 云々 蔓延八丘八谷

之間(源) タウヤ 三 此主とおおまきもそひごさる時をべめる(同) 四 いで見んとてそ

ひごさる(同) そま 四十 ありのうらひさそひごさるをどかれバ(同) 明石 四十 たゞ

そひごさるをどの片時のまといへど そひごさる (同) 若菜 下廿 ついでかくまさま

ふとどぞふと打見えさる(後撰) 三 父母侍りける人の娘は恐びてかよひ侍りけるを

聞つけて云々 「まよのそひごさるよ一昔のねのうれしき雨はあらなる、哉

そひかゝる そひ掛る そひかゝり (源) 夕霧 卅 さま／＼にいとあごさ／＼くちひさ

き兒そひり、り引いろへバ(枕) 十六 五 あれさる家まむぐらそひり、り そひかゝれる

(源) タウヤ 三 いと青やりあるうづらのこ、ちよけにそひかゝれるに 云々

そひかくる そひ隠る そひかくれ (源) 帚木 二十 深き山里世をかされる海づらあとに

そひかくれぬり 畢ぬ (同) 夕顔 七 うらかくたゆめてそひりくれあべいづこをそか

りとりこれもさづねん(同) 四十 西の京に御めのとのすも侍る所よあんそひかくれ

給へり(同) 若紫 廿 女君例のそひりくれてとまよも出給ひぬを(同) 總角 卅 やをら

おき出給ひぬいととくそひりくれ給ひぬるに 補 (源) 浮舟 十 をりしもそひりくれさ

せ給へるやうならん(同) いりてりわたとなくてのそひりくれさせ給へん

そひよる そひ寄 そひより (源) 夕霧 廿 女君物へさてるやうかれといととく見

つけ給ひてそひよりて御うしろよとり給ひつ(同) 寄生 九十 只今もそひよりて世

中はおひける物をといひかぐさめまろ(狭) 卅 下よろづにもてあつひつ、そ

ひよりていとさまらうさまにうらむるを(榮) 衣の珠 四 中納言殿もそひより、此

若君を打見／＼なき給ふ そひよらん (源) 若菜 二百 そひよらんも中々いとかる／＼

いけれバ

そひつとふ そひ傳 (山家) 上山路の 「そひつとひをらせつ、トを手とるさうり
き山のとり所の

そひつくもふ 俗と (盛衰) 四十二 東國のものども、黨も高家もそひつくもふてこ
そありあり

そひね 延根 (夫) 廿二久安六 「大ともの松乃そひねを枕よてさうりの瀆まろね
してけり

補そひうら 占戀 (長方) 「れもひきやすさひよするそひうらもあふてふ事ハう
れハうりけり (拾玉) 「ねさめざるよその埋火かきのけてとふそひうらもうき身
ありけり

そひのぞる そひ登 (竹取) 云々 といふま、にえんにそひのぞり給ひ
ぬ (蜻蛉日記) 上 下親をもめをも打きて、山にそひのほりて法師にありハけり

そひのる そひ乗 馬車舟あど (そひのり) (万) 五 ちづくら打おき波比能利て(うつ
祭の使) 六 御馬左右とひりせて参りり 云々をのこともそひのりて心よとの

給ふ (蜻蛉日記) 上 馬よそひのりる人ハて打さ、ちす (同) 中 さきさちたり人
舟にてもやうハひきてまうけたり物も覺えそひのりされを (同) 上 十ひとつ車ハ

そひのりて (うつ不) 初秋 下六 父おとの御車の 云々そひのりて 補 (うつ不) 祭の使) 七
馬よそひのりつ、

そひれく そひ起 俗のトビ オキテ也 (そひれき) (宇治拾) 七 十 あけんとする夜の夢ハ 云々
とくくハまりり出よとおはる、とてそひおきてやくろくの僧のがりゆきて

そひまつとる 延纏 トフ也 (そひまつはれ) (古) 春下 遍昭 「よそよとてかへらん人に藤の
花そひまつはれよ枝ハをるとも (源 夕顔と申侍る 云々むねハからぬ
軒のつまでとにそひまつはれるを

そひまぎる そひ紛 (源 帯木) 四十 七 ちるハくそひまぎれハちより
給いんも人めハけりらん所ハびんあきふるまひやあらハれん (同 空蟬) 九 いづこハ

そひまぎれてりたくなハと思ひるとらん
そひまどる 延交 (源 総角) 六十 ときハ木にそひまどれるハ蔦の色と

も物おらけにまえて 云々
そひおハい 匍匐臥の意ある。(抄) 身を自由にあり (枕) 五 廿 いくハで女官などのやう
に着ッきてハわらんといハ 云々 例のそひおハいハからハせ給へるおまハへたハあ
ればとて

そひふそ 延 臥 **そひふせる** ふしける (枕) 九 のとき又の日ころ 云 大元ある木とも

ふれ枝あと吹をられさるたにをさき萩女郎花あの上よりろすひもひふせる

そひこる 蔓 (落窪) 一 いりて子うませんと思ふ少將の君のよみ出でて此いれるもの

そひこる ひろ ことよとの給ふを (本朝文粹) 四 具知其凶類 滋蔓殺 畧良民 補 (齋)

宮女御 そびこれる葛の 一さふく風の音もされり今わきくべかりける

そひえ 延 枝 (散木) 卅七 すまのうらやなぎさよとてうなれ松そひえを波のうら

ぬ日ぞなき (同) 卅六 うらむともあらでや鹿のいさりよみ萩のそひえをいぐらま

くる (新拾 補 (金) 春 經信 池よひつ松のそひ枝よむらさきの浪をりりくる藤さねよけり

そひありく そひ歩行 **そひありき** (伊勢物) 八 いさよきの下よそひありきて 云々

そひひろでる 延 廣 **そひひろでり** (古) 序 のべよおふるかづらのそひひろでり 云々

そも てよをこのはよもを (古) 戀 一 春日野の雪間をわけておひ出くる草のまつり

よとえし君そも (同) 卅 霜のふりそも といへ (万) 四 五 二が名者毛 云々 (同) 二 卅

島の宮婆母 かど 猶 多 **補 (万) 卅一** 「やきつへよとがゆきしりばするがなるあべの市道

よあひし子らそも (同) 卅二 「あへよいさづが糸なきてとなと風さむくふくらむつ

をのさきそも (古) 大 歌 所 御 歌 「とづぐきの岡のやりと妹とこれとねての朝けの霜の

ふりそも (万代) 清 輔 「ちる花のちの春ともまされけり又もくまときこりざりりそも

(新續古) 五 「あさなく草葉よりくおくつゆのさえバともよといひし君そも

(拾愚) 上 「けさのまあとかきとめるとづぐきの岡のやりと雪のふりそも

そもりのり 葉 守 の 神 契冲云顯昭云葉もりの神と樹神也万の木を守る神也さ

て葉を守る神也かく注せられされと基俊の歌に葉守の神を柏木よまれされ

バ柏木よるてあさし木をもまもらる、よや仁徳紀よ葉 此 云 箇 始 嬰 と注せられされバ葉

いかにそをもと、するあるべしつ物語國のづりの巻に「おいてさバも、か

いよやかりよける子日を千代とかぞふべき松小松の葉の百ばかりあるをいへり 上

契 (枕) 八 かしの木いとをりしそもりの神のまをらんもいとかしこし (後撰) 杷 左 大 批

臣 「からのもの (大和物) 二 か ともりの神のまけるを忘れてぞをりした、りなさる

を (源 柏木) 四十 「かしの木よそもりの神のまさほとも人あらまべき宿の梢 (新古)

夏 基俊 「玉グーのまけりにけりを五月雨よそもりの神のいめもふるまで (金葉) 頼 秋 俊

「あらしをやそもりの神もさ、らん月よ紅葉のたむけりてけり つれ 補 葉 守 の 神 北 邊 隨 筆 説

り (月詣) 通 「かしの木のももりの神のさ、れをやとくさの山のさしをあららん (狹

上) 「かしの木のももりの神よあとでこが雨もらさととちぎらざりけん

【せせをま】芭蕉(和名)十九、芭蕉(平波)古物名、まつ、ひと、と、「いさ、めに時まつま
はぞ日へぬる心むせをば人よ見えつ、**補**(信明)物名、と長谷寺やけとりときくこ
ろ「世中のこのみ所よせしものをせせをばかくややうむとおもひ」

【せせ】(夫)四為家「花ざりりちりにせすなる小車のとり身一つぞやるりともあき
【せせる】(つれ)八段をのこの馬をせしらひむると見て今一度馬をせする物か
らば馬とふれて落べー云々又馬をせせ云々【せせ】(盛衰)四十二【せせける】(盛衰)初段【せせ

よものどもこけやものどもとてえい聲を出してせせけれハ【せせける】(盛衰)初段【せせて】(同)四十五
忠綱よくまんど心ざしてせせてか、りけるを**補**(宇治拾)十三、馬をせせて鹿おふ
【せせゆく】(盛衰)二段東帯を正しうして内裏よりやがて三井寺へせせゆきて【せせま

【る】(同)四十二【せせま】(り)四十一【せせまゆ】(同)四十八段備前備中備後安藝周防をせ
せこえて【せせ加】(り)四段おひつき〜にせせく、る【せせ集る】(同)二段【せせ
集りて】(せせ)二段馬よのりてせせちらして殿に参りて

【せす】蓮。おちそ。おちそ別。おちそ出。おちそ【せすの花】(枕)十一一切經をせその花のありたにひと
花づ、よいれて【せそのうき葉】(枕)三【せそのうき葉】(枕)三【せそのうき葉】(枕)三【せそのうき葉】(枕)三
【せす】蓮。おちそ。おちそ別。おちそ出。おちそ【せすの花】(枕)十一一切經をせその花のありたにひと
り(拾玉)七「いくさびり西に心のかよふらん蓮の浮葉の露の夕ぐれ【せそのおち葉

【堀川】俊「雨ふればおそのおちおにる玉のこえはこざる、こが涙哉貞徳が説は蓮
の草よもいへるういまぶしらすといへり【せそのこ】蓮子(蜻蛉日記)中上【せそのこ】
もとを人していれり此時の事(玉)雜【延喜式】五蓮子子瓊各一升(盛衰)【三十三

入道の左の手よおそのこの念珠をもち右の手に蒲のうちををつりひ給ひて(和名)
【せせ】弓矢よ(雄略紀)三立弓執(神樂歌)「さつて(古本)らがもせせの眞弓おく山よ
【せせ】待賢門又能引て追さよいひのりくる、やど射こまより云々

【せせか】(清輔與義抄)七【せすな】(のう)へつれあきうらよこそ物あらがひの
つくといふなれ(後撰戀五)【せせあ】(は)らづらのやうよて海のおもてよ浮ておひさる
物也それがうらよちひさき貝どものつきさる也うへよいさりけもとえせうらよつ

【せせ】(和名)十三釋名云弓末曰彌(由美)【同】(唐韻)云筈(古活)【夜波須】(箭受)【弦處也】(平治)
【せせ】(清輔與義抄)七【せすな】(のう)へつれあきうらよこそ物あらがひの
つくといふなれ(後撰戀五)【せせあ】(は)らづらのやうよて海のおもてよ浮ておひさる

【せせ】(清輔與義抄)七【せすな】(のう)へつれあきうらよこそ物あらがひの
つくといふなれ(後撰戀五)【せせあ】(は)らづらのやうよて海のおもてよ浮ておひさる
物也それがうらよちひさき貝どものつきさる也うへよいさりけもとえせうらよつ

【せせ】(清輔與義抄)七【せすな】(のう)へつれあきうらよこそ物あらがひの
つくといふなれ(後撰戀五)【せせあ】(は)らづらのやうよて海のおもてよ浮ておひさる
物也それがうらよちひさき貝どものつきさる也うへよいさりけもとえせうらよつ

むぎる 葉末 (千) 秋上 親盛 「あさぢ原葉末よむれお露でとよ光りをこけて宿る月りあ

(源賢集) 法花經とく 「むすず、るむちの糸をとられぬは葉末のいかでとされさら

ま (拾遺愚草) 中 「春くれていくかもあらぬを山風よ葉末かよよりあびく下くさ

(新古) 雑中 成仲 「あけくれのむりゝをのぞ忍ぶ草をむぎるの露よ袖ぬらいつ、(拾玉)

七 「やがてさの伏見の小田の夕早苗はむぎるの風の秋の色なる、

増補雅言集覽卷之六 終

